鶴光路榎橋Ⅱ遺跡・徳丸高堰Ⅲ遺跡

北関東自動車道　道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

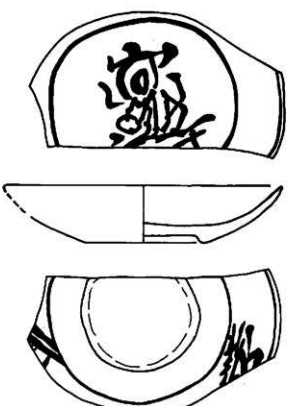
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．鶴光路樋検Ⅱ遺跡Ⅱ－1号住居址出土遺物

2．徳丸高塚Ⅲ遺跡Ⅳ－3・5号溝出土遺物

鶴光路榎橋Ⅱ遺跡・徳丸高堰Ⅲ遺跡

北関東自動車側道　道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



徳丸高堰Ⅲ遺跡W－2号溝出土の青花皿

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、市内中央部を利根川、広瀬川が流れ、敷島公園や前橋公園、嶺公園、大室公園などの公園が市内各地にあり、近代詩のふるさとであり、「水と緑と詩のまち」と呼ばれる自然と文化、歴史に恵まれた町です。

市内には古代からの歴史を物語る古墳、寺跡などの史跡が残り、古代東国の中心地であったことがわかります。

国指定の史跡は10カ所を数え、全国でも有数の地域といえます。現在その整備も進められており、21世紀に残す文化財として地域の歴史を知る貴重な存在です。

また、市内では古代の人々の生活の跡もいたるところに残されており、各種の開発に伴っての発掘調査で発見されてきています。市内でも近年の北関東自動車道関連の調査で新たに発見された遺跡も多く、市内南部地域の歴史解明に大きく貢献しています。

徳丸高堰Ⅲ遺跡と鶴光路榎橋Ⅱ遺跡も北関東自動車道関連の調査になりますが、徳丸高堰Ⅲ遺跡では、平安時代の住居跡のほか中世と近世の溝を検出しました。

鶴光路榎橋Ⅱ遺跡では、平安時代の住居のほか近世の溝を検出しました。

両遺跡の調査結果ともに地域の新しい資料であり、地域の新しい姿を知ることができました。

本調査実施にあたりまして、ご協力をいただきました関係課、関係機関、地元関係者の方々、酷暑の中調査に従事されました作業員の方々に感謝申し上げると共に、本報告書が、市史解明の一助となることを祈念して序といたします。

平成12年3月23日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　渡辺勝利

例　　言

1．本報告書は、北関東自動車道関道　道路改良事業に伴う鶴光路榎橋Ⅱ遺跡（つるこうじえのきばしにいせき）・徳丸高堰Ⅲ遺跡（とくまるたかぜきさんいせき）発掘調査報告書である。

2．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

3．発掘調査の要項は以下のとおりである。

調　査　場　所　前橋市鶴光路町277－1ほか

発掘・整理担当者　青田聖二・小峰　篤（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

発掘調査期間　平成11年5月12日～平成11年11月10日

整理・報告書作成期間　平成11年11月11日～平成12年3月23日

4．本書の原稿執筆・編集は吉田・小峰が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部シゲ子・神澤とし江・桐谷秀子・櫻井妙子・田口桂子の協力があった。

5．発掘調査にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）

阿部シゲ子　神澤とし江　桐谷秀子　櫻井妙子　桜井　弘　高橋　攸　中村新太郎

奈良岩雄　原田要三　古沢　実　柳井品子

6．陶磁器については、財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　大西雅広氏にご教示いただいた。

7．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に、建設省国土地理院発行の1/5万地形図（前橋・高崎）を使用した。

3．本遺跡の遺跡コードは鶴光路榎橋Ⅱ遺跡が11G35、徳丸高堰Ⅲ遺跡が11G36である。

4．各遺構の略称は次のとおりである。

H…住居址　K…掘立柱建物　D…土坑　I…井戸　W…溝　O…落ち込み　P…柱穴（ピット）

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺　構　住居址・堀立柱建物・土坑・落ち込み…1/60、

竈断面図…1/30、溝址…1/60・1/100・1/120、全体図…1/160

遺　物　土器・土製品…1/2・1/3・1/4、石製品…1/2・1/4、銭貨…1/1

6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図　構築面…

遺物実測図　施釉範囲…　炭化物（スス付着など）…

須恵器断面…

7．表中の数値の中で、（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。

目　　次

序 …… i

Ⅰ 調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ 遺跡の位置と環境
1 遺跡の立地 …… 1
2 歴史的環境 …… 3
3 層　　序 …… 4

Ⅲ 発掘調査の経過
1 調査方針 …… 5
2 調査経過 …… 5

Ⅳ 鶴光路榎橋Ⅱ遺跡
1 遺構と遺物 …… 10
(1) 竪穴住居址 …… 10
(2) 土　　坑 …… 12
(3) 溝 …… 12
(4) グリッド等出土遺物 …… 12
2 考　　察 …… 13

Ⅴ 徳丸高堰Ⅲ遺跡
1 遺構と遺物 …… 30
(1) 竪穴住居址 …… 30
(2) 掘立柱建物 …… 31
(3) 土　　坑 …… 31
(4) 井　　戸 …… 31
(5) 溝 …… 32
(6) 落ち込み …… 34
(7) グリッド等出土遺物 …… 35
2 考　　察 …… 36

図　　版

口絵　1　鶴光路橋板橋Ⅱ遺跡H－1号住居址出土遺物
　　2　徳丸高塚Ⅲ遺跡W－3・5号溝出土遺物

Pl.. 1　鶴光路橋板橋Ⅱ遺跡東側全景、H－1号住居址
　　2　H－1～4号住居址
　　3　H－5・6・8～10号住居址、D－1号土坑、
　　W－1・2・4号溝
　　4　H－1号住居址出土遺物
　　5　H－1号住居址出土遺物
　　6　H－1・2号住居址出土遺物
　　7　H－2～4号住居址出土遺物
　　8　H－4・6・9・10号住居址出土遺物

Pl.. 9　徳丸高塚Ⅲ遺跡C区全景、H－1・2号住居址
　　10　H－3～5号住居址、K－1掘立柱建物、
　　I－1号井戸
　　11　W－1号溝、徳丸高塚Ⅲ遺跡B区南側全景
　　12　W－2～4号溝
　　13　W－5号溝
　　14　徳丸高塚Ⅲ遺跡C区全景、W－7号溝
　　15　W－7・8・13・15～17号溝
　　16　H－1号住居址、W－1号溝出土遺物
　　17　W－1・2号溝出土遺物
　　18　W－3・5号溝出土遺物
　　19　W－5号溝出土遺物
　　20　W－5・7・8号溝出土遺物
　　21　W－1・2号溝出土遺物
　　22　H－2号住居址、
　　W－1・2・4・5・7・8号溝出土遺物

挿　　図

　　頁

Fig.　1　遺跡位置図 …… v
　　2　位置図と周辺遺跡図 …… 2
　　3　標準土層図 …… 4
　　4　鶴光路橋板橋Ⅱ遺跡・
　　徳丸高塚Ⅲ遺跡調査区設定図 …… 6
　　5　鶴光路橋板橋Ⅱ遺跡全体図 …… 8
　　6　H－1・2号住居址 …… 17
　　7　H－3～5号住居址 …… 18
　　8　H－6～10号住居址 …… 19
　　9　D－1～3号土坑、W－1～4号溝 …… 20
　　10　H－1号住居址出土遺物 …… 21
　　11　H－1・2号住居址出土遺物 …… 22
　　12　H－3・4・6・7・9・10号住居址、
　　W－4号溝出土遺物 …… 23

　　頁

Fig.　13　徳丸高塚Ⅲ遺跡A区全体図 …… 24
　　14　徳丸高塚Ⅲ遺跡B区全体図 …… 26
　　15　徳丸高塚Ⅲ遺跡C区全体図 …… 28
　　16　H　1・2号住居址 …… 43
　　17　H－3～5号住居址 …… 44
　　18　K－1号掘立柱建物、
　　D－1～4号土坑、I－1号井戸 …… 45
　　19　W　1・2・4・13号溝 …… 46
　　20　W－3・5・6号溝 …… 47
　　21　W－7～12・14号溝 …… 48
　　22　W－15～17号溝、O－1～8号落ち込み …… 49
　　23　H　1・2・4・5号住居址、
　　W－1号溝出土遺物 …… 50
　　24　W－2・3・5号溝出土遺物 …… 51
　　25　W－5～7号溝出土遺物 …… 52
　　26　W－7・8・12号溝出土遺物 …… 53
　　27　H－2号住居址、
　　W－1・2・7・13号溝出土遺物 …… 54
　　28　W　2号溝出土遺物 …… 55
　　29　W－1・2・4・5号溝出土遺物 …… 56

表

　　頁

Tab.　1　鶴光路橋板橋Ⅱ遺跡土器観察表 …… 14
　　2　石製品観察表 …… 16

　　頁

Tab.　3　徳丸高塚Ⅲ遺跡土器観察表 …… 39
　　4　石製品観察表 …… 42
　　5　土製品観察表 …… 42
　　6　銅銭観察表 …… 42

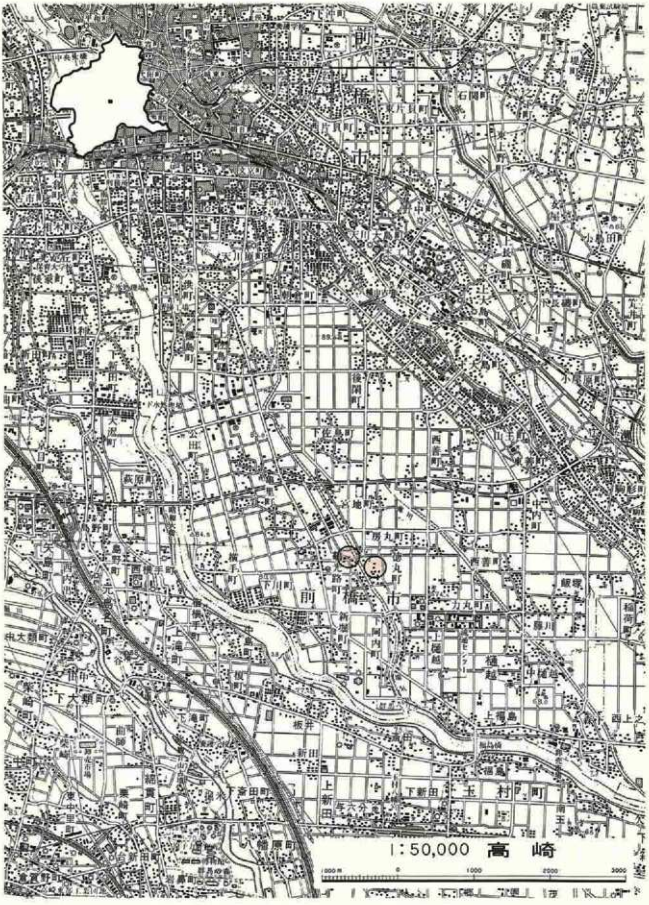


Fig. 1 遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、北関東自動車道個道道路改良事業に伴うものである。平成11年４月19日、前橋市長より北関東自動車道対策室を通じて当該事業に係る埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受けて、前橋市教育委員会の内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団が発掘調査を受諾することとし、同年５月12日に前橋市長と、前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。そして、同年６月２日より現地での発掘調査を開始するに至った。その後、群馬県埋蔵文化財発掘調査取り扱い基準の変更等に伴い、３度にわたる契約変更を行った。

なお、遺跡名称「鶴光路榎橋Ⅱ遺跡」・「徳丸高堰Ⅲ遺跡」の「榎橋」・「高堰」は、旧地籍の小字名を採用した。また、名称中のローマ数字は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が北関東自動車道本線部分で発掘調査をしていることから、それと区別するため遺跡名に付けたものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡の立地

今回の発掘調査区である鶴光路榎橋Ⅱ遺跡及び徳丸高堰Ⅲ遺跡は、前橋市の南端に位置する。鶴光路町、房丸町、徳丸町の三町にまたがり、前橋市役所の南東約６kmのところにある。本調査区は、現在建設中である前橋南インターチェンジ（仮称）を、本線北側の側道がインターを迂回する部分である。周辺道路としては、南北方向に主要地方道前橋玉村線、東西方向には県道27号高崎駒形線が走っている。さらに、北関東自動車道へのアクセス道が調査区すぐ西に現在建設中である。高崎駒形線沿いには、工場、運輸会社の倉庫、資材置き場、ファミリーレストランやコンビニエンスストア等のロードサイド店舗などが多数立ち並び、前橋市内でも交通量の多い道路の一つである。また、調査区の南西には下川住宅団地さらに東には東善住宅団地があり市街化が進んでいる。将来的には、北関東自動車道のインターチェンジができることから、周辺地域のより一層の市街化が進むものと思われる。地形的に見ると、前橋市は地形・地質の特徴から北東部の赤城火山斜面と南西部の洪積台地（前橋台地）と、両者に挟まれて地溝状になった沖積低地（広瀬川低地帯）、及び現利根川氾濫原の四地域に分けられる。本遺跡は、利根川と広瀬川に囲まれた前橋台地上に位置する。前橋台地は市の南西部であり、広瀬川低地帯より一段高い洪積層からなり、多少の起伏はあるもののほとんど平坦な土地である。標高にして約75～80mである。両遺跡間には端気川が北西から南東方向に向かって流れている。この端気川は、市内朝日町一丁目所在の十六本堰にて広瀬川と分かれ南下し、市の最南端下阿内町先で利根川に合流する。分水から合流までおよそ９kmで、前橋南部農耕地帯の重要な用水である。また、利根川に合流するまで多数の堰が存在し、他にいくつもの用水を分流している。元は蛇行する形をとっていたが、ここ近年の河川改修事業によりほぼまっすぐになった。そのため、両遺跡が所在する微高地を断ち割る結果になっている。なお、鶴光路榎橋Ⅱ遺跡は、端気川の右岸（西側）に、徳丸高堰Ⅲ遺跡は左岸（東側）になる。

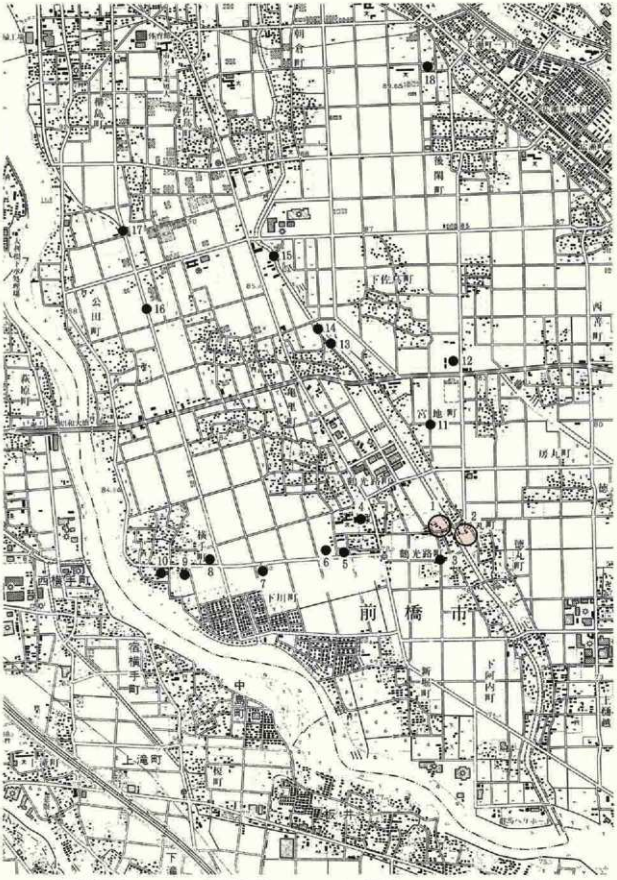


Fig. 2　位置図と周辺遺跡図

2．歴史的環境

本遺跡地が所在する前橋南部地区では近年、北関東自動車道建設をはじめ、住宅団地の造成などの開発が進み、それに伴う発掘調査が大規模に行われている。そうした発掘調査の結果数多くの遺跡が確認されている。ここでは、本調査区の周辺遺跡について概観してみたい。

縄文時代の遺構については本遺跡地の東にある西善尺司遺跡から石器製作跡と思われるブロックが一カ所検出されている。土器の出土はなかったもののチャート製の石鏃が1点見つかっており、その形態から縄文時代前期から中期と考えられる。

古墳時代となると、北関東自動車道建設に伴う調査で明らかとなった西善尺司遺跡、中内村前遺跡、前田遺跡、徳丸仲田遺跡などが挙げられる。中内村前遺跡からは、鋤先などの農具を中心とした木製品が数十点出土し、前田遺跡では、和泉式土器を伴う5世紀前半から後半頃と思われる竪穴住居址を始め、掘立柱建物、井戸、溝等から構成される集落跡や水田跡が検出されている。また、西善尺司遺跡においては、方形周溝墓が14基検出されている。

奈良・平安時代になると本遺跡が属する地域のほとんどの遺跡から遺構が検出される。中内村前遺跡では、全調査区で162軒の竪穴住居址が確認され、住居内より墨書土器や小型の須恵器「水差し」等が出土している。また、同じく中内町とそれに隣接する東善町にまたがる前田遺跡からも、微高地で約100軒の竪穴住居址が見つかっている。このように概ね微高地では集落跡が、また低地部からは浅間山や榛名山の噴火の際に降り積もった軽石及び火山灰、その後の洪水層で埋もれた水田跡が確認できる。

中世・近世では、多くの環濠遺跡群、環濠屋敷が確認されている。環濠屋敷とは、争乱の世においては平時から自己の保護のために自らの屋敷の周囲を濠で囲み、自衛手段を講じた屋敷のことである。このようなことは、既に古代から行われていたものと考えられ、単に防備のためばかりではなく排水や土地の境界のため、また、都城や寺院の区画を定めるためなどに用いられ、その後は有力武士の館などに多く見られるようになった。戦国時代も末期ころになると、かなり一般的になり小規模なものも多数見られるようになった。徳丸仲田遺跡、西善尺司遺跡、中内村前遺跡、前山遺跡、房丸東環濠遺構群、西善環濠遺構群、旧西善環濠遺構群、徳丸環濠遺構群、東力丸環濠遺構群、横堀環濠遺構群、東宮地環濠遺構群、山王環濠集落、後閑環濠集落、後閑大屋敷、中橋越屋敷、阿左美環濠遺構群、阿左美館、藤川環濠遺構群、飯塚環濠遺構群、雉子屋敷、今村環濠遺構群などがそれである。

3．層　　序

総光路板橋Ⅱ遺跡及び徳丸高堰Ⅲ遺跡は、前橋市の南部、前橋台地上に位置する。前橋台地は、上部から順に表土（黒土）、褐色火山灰質シルト層（水成上部ローム層）、火山泥流堆積物（前橋泥流堆積物）などから形成される。褐色火山灰質シルト層は、一般的に層厚３ｍ前後である。また、その中部に層厚10～30cmほどの泥炭質粘土シルト層を挟むことがあり、これは前橋泥炭層と呼ばれ、今から約１万３千年前に堆積したものである。さらにその下位層の火山泥流堆積物は、約２万４千年前に形成されたものと考えられ、層厚は10数ｍにも及ぶ。前橋泥流の給源については、基質の重鉱物組成から浅間山である可能性が大きいと考えられる。

本発掘調査の標準土層は、畑作地として現在まで利用され、宅地開発等の影響を受けていない徳丸高堰Ⅲ遺跡の最も北に位置するＣ区北壁東側のＸ31、Ｙ７グリッドで確認した。

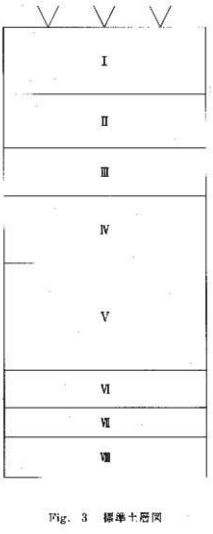


Fig. 3　標準土層図

Ⅰ層：褐灰色粗砂層　粘性ややあり、締りなし。現在の耕作土層。
Ⅱ層：灰褐色粗砂層　As－B（浅間Bテフラ；1108年）を若干含む。粘性ややあり、締りあり。
Ⅲ層：黒褐色細砂層　As－C（浅間C軽石；４世紀前半）を若干含む。粘性、締りともにあり。
Ⅳ層：にぶい黄色粗砂層　粘性、締りともにあり。
Ⅴ層：暗灰黄色粗砂層　粘性、締りともになし。
Ⅵ層：灰黄褐色粗砂層　鉄分凝固が見られる。粘性なし、締りあり。
Ⅶ層：淡黄色シルト層　粘性あり、締りややあり。
Ⅷ層：明黄褐色粗砂層　粘性なし、堅く締る。

Ⅲ　発掘調査の経過

1．調査方針

調査委託された鶴光路榎橋Ⅱ遺跡、徳丸高堰Ⅲ遺跡は、北関東自動車道の前橋南インターチェンジ（仮称）を辿回する北側側道部分である。幅員は約11mで道路の両側に約３mの歩道が付く。鶴光路榎橋Ⅱ遺跡は端気川の西側から、現在建設中の北関東自動車道へ接続する部分までで、一団の土地である。また、徳丸高堰Ⅲ遺跡については、端気川の東側部分となり、調査対象となる箇所が用地買収の関係上地続きになっていないので、北からＡ区、Ｂ区とした。なお、調査開始後にＡ区の北側に追加調査となった箇所については、Ｃ区とした。両遺跡地周辺には、調査に伴う排土置き場が確保できないため切り返しによる表土掘削を行った。調査開始当初においては、車道及び歩道部分を調査対象としたが、平成11年６月１日付けで群馬県教育委員会から埋蔵文化財発掘調査取り扱い基準についての通知があり、その後の調査では歩道部分を調査対象外とした。調査面積については、鶴光路榎橋Ⅱ遺跡が398㎡、徳丸高堰Ⅲ遺跡が893㎡、総計1,291㎡である。グリッドについては、５mピッチでその呼称は北西杭の名称を使用した。また、調査段階での方法は次のとおりである。

１）鶴光路榎橋Ⅱ遺跡並びに徳丸高堰Ⅲ遺跡は西から東へＸ０、Ｘ１、Ｘ２・・・、北から南へＹ０、Ｙ１、Ｙ２・・・と付番し、測量の基準点Ｘ13・Ｙ８の公共座標は、

第Ⅸ系	＋37110.000m（Ｘ）	－65385.000m（Ｙ）	
緯度	36°19′56″.2364	経度	139°06′17″.7514
子午線収差角	25′53″.7	増大率	0.999953　である。

２）調査は各遺跡ともに表土掘削・遺構確認・杭打設・遺構掘り下げ・遺構精査・図面作成・全景写真撮影の順で行った。図面作成にあたっては、平板・簡易やり方測量を用い、通常、遺構は1/20、住居址カマドは1/10、調査区全体図は1／40の縮尺で作成した。遺物は平面分布図を作成し、台帳に各種記載をし収納した。包含層の遺物は、グリッド単位で収納したが、重要遺物については分布図・遺物台帳に記載を行って収納した。

2．調査経過

本調査は、平成11年６月２Ｈに着手し平成11年11月10日に終了した。６月２日、鶴光路榎橋Ⅱ遺跡西半分、徳丸高堰Ⅲ遺跡Ａ区・Ｂ区の北半分の表土掘削を開始。プラン確認の結果、鶴光路榎橋Ⅱ遺跡からは竪穴住居址、溝、土坑などが検出された。徳丸高堰Ⅲ遺跡では、溝が確認された。調査着手後１ヶ月ほどした頃から本格的な梅雨に入り、現場では調査区に溜まった水を抜きながらの作業となった。各調査箇所で精査を行い、図面及び全景写真の撮影を済ませ、７月28日に徳丸高堰Ⅲ遺跡、８月４日に鶴光路榎橋Ⅱ遺跡における半面の調査を終了した。埋め戻しが完了した後、まず徳丸高堰Ⅲ遺跡Ａ区の南半分の表土掘削を行った。しかし、遺構が確認されず平面図及び全景写真を撮影し、そのまま埋め戻しとなった。続いて鶴光路榎橋Ⅱ遺跡東側と徳丸高堰Ⅲ遺跡において追加調査となり未着手だったＣ区の全面表土掘削を併せて開始した。新たに掘削した調査区からは、竪穴住居址、ピット群、多数の溝などが検出された。鶴光路榎橋Ⅱ遺跡東側では10月１日にハイライダーによる全景写真を撮り、調査は終了となった。また、徳丸高堰Ⅲ遺跡Ｃ区の溝や住居址の調査を進めると同時に、一部２面目の表土掘削を実施した。結果、掘立柱建物と考えられる遺構が検出された。同時に、徳丸高

堰Ⅲ遺跡B区南側の表土掘削も併せて行われた。ここでは、北半分を調査した際検出した溝の続きが確認された。11月5日に徳丸高堰Ⅱ遺跡B区、C区をハイライダーによる全景写真を撮影し本年度の調査を終了した。その後、二之宮町地内の城南収蔵庫において報告書作成に向けて整理作業に入った。

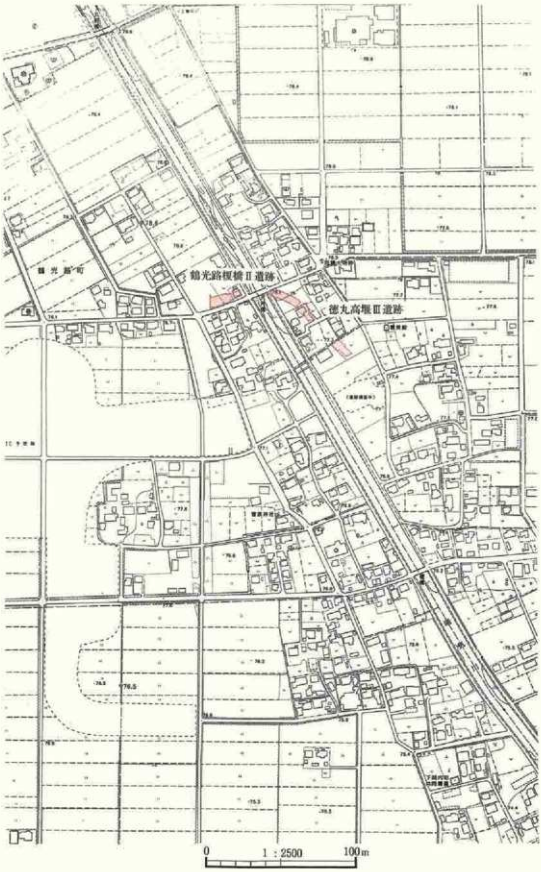


Fig. 4　鶴光路横堰Ⅱ遺跡・徳丸高堰Ⅲ遺跡　調査区設定図

鶴光路榎橋Ⅱ遺跡

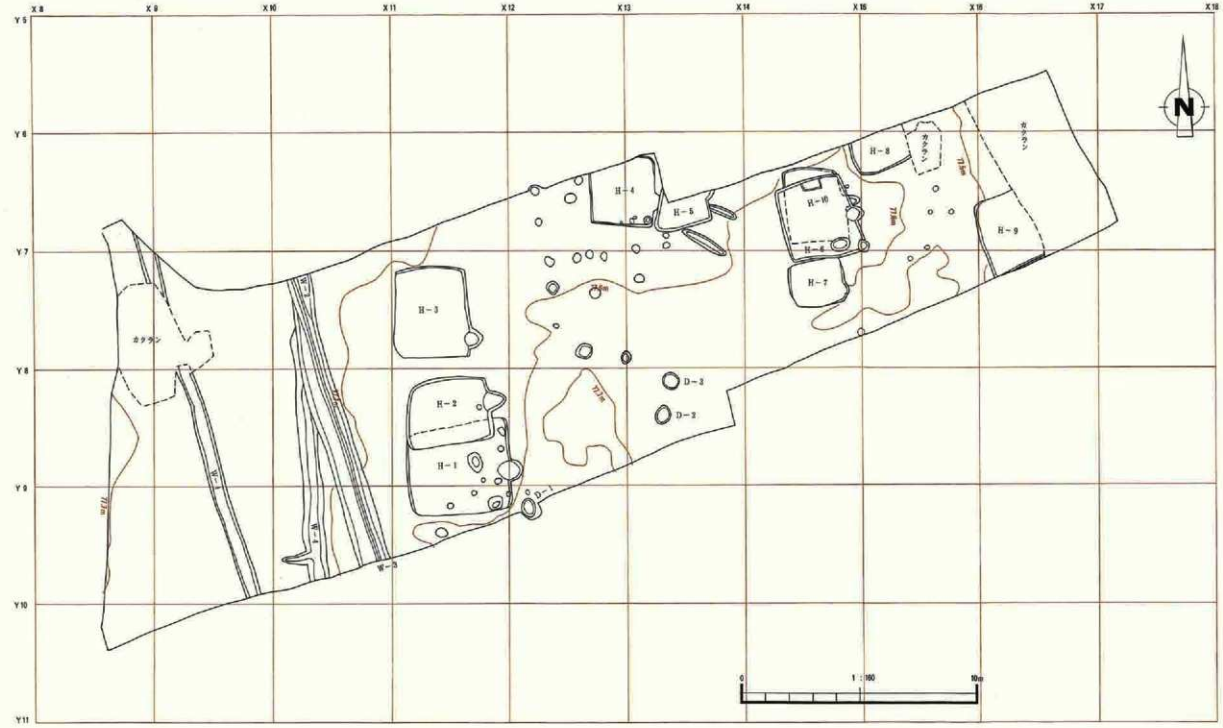


Fig. 5 輔光路模横Ⅱ遺跡全体図

Ⅳ　鶴光路榎橋Ⅱ遺跡

1　遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は竪穴住居址が10軒、土坑３基、溝４条である。

調査地は宅地と畑作地で、端気川の西側微高地に立地する。遺構面は礎物の基礎工事などのかく乱や、耕作による削平で遺構の確認は困難を極めた。検出された遺構は出土遺物などから平安時代と近世の２時期に分類することができる。特に多いのは平安時代の遺構で、溝が１条、竪穴住居址が10軒である。その他にピット群や土坑等を含め、９世紀後半の集落跡と考えられる。

近世の溝からは遺物がほとんど検出されず、正確な時期の判定は困難であるが、溝の埋土を洗い出したところ浅間山のものと考えられる軽石（浅間Ａテフラ）が多く含まれることから、1783年（天明３年）の浅間山噴火から遠くない時期に埋没した遺構である可能性が高い。

(1)　竪穴住居址

Ⅱ－１号住居址（Fig. 6・10・11　PL. 1・2・4・5・6）

◎位置　X11～12、Y８グリッド　◎面積　16.41㎡　◎方位　N　82°　E　◎形状　東西に延びる長方形。長軸4.42m、短軸3.75m、壁高７cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。住居南東隅に貯蔵穴を検出。　◎竈　東壁やや南寄りに設置。全長64cm、焚口幅69cm　方位　N－90°－E。　◎重複　Ⅱ－２と北壁で重複する。本遺構の方が古い。　◎遺物　総数299点。土師坏、須恵高台埦などが出土。他に灰釉高台埦や台付甕なども見られた。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は９世紀後半と考えられる。

Ⅱ－２号住居址（Fig. 6・11　PL. 2・6・7）

◎位置　X11～12、Y７～８グリッド　◎面積　10.20㎡　◎方位　N－85°－E　◎形状　長方形。長軸3.52m、短軸2.80m、壁高10cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。住居南東隅に貯蔵穴を検出。　◎竈　東壁やや北寄りに設置。全長84cm、焚口幅68cm　方位　N－79°－E。　◎重複　Ⅱ－１を切る。　◎遺物　総数382点。土師坏、須恵坏、須恵高台皿などが出土。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は９世紀末と考えられる。

Ⅱ－３号住居址（Fig. 7・12　PL. 2・7）

◎位置　X11～12、Y６～７グリッド　◎面積　12.03㎡　◎方位　N－89°－E　◎形状　方形。長軸3.78m、短軸3.12m、壁高８cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎竈　東壁の南端に設置。全長62cm、焚口幅57cm　方位　N－92°－E。　◎遺物　総数77点。土師坏、須恵坏が出土。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は９世紀末と考えられる。

Ⅱ－４号住居址（Fig. 7・12　PL. 2・7・8）

◎位置　X13、Y５～６グリッド　◎面積　7.54㎡　◎方位　N－83°－E　◎形状　北西角部分が調査区外のため確認できないが、ほぼ方形と考えられる。長軸3.02m、短軸2.77m、壁高12cm。

◎床面　ほぼ平坦な床面。住居南東隅に貯蔵穴を検出。　◎竈　東壁やや南寄りに設置。全長21cm、焚口幅60cm 方位　N－92°－E。　◎重複　カマド先端部分をH－5に切られる。　◎遺物　総数330点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

H－5号住居址（Fig. 7　PL. 3）
◎位置　X13～14、Y6グリッド　◎面積　3.74㎡　◎方位　N－72°－E　◎形状　北側半分が調査区外のため不明。長軸2.18m、短軸1.20m、壁高11cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎竈　東壁に設置されているが、調査区内で確認できるのは一部。　◎重複　H　4の竈先端部分を切る。
◎遺物　総数185点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

H－6号住居址（Fig. 8・12　Pl. 3・8）
◎位置　X14～15、Y6グリッド　◎面積　10.27㎡　◎方位　N－77°－E　◎形状　北西から南東方向の長方形。長軸3.46m、短軸3.07m、壁高6cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。住居南東隅に貯蔵穴を検出。　◎竈　東壁ほぼ中央に設置。全長48cm、焚口幅48cm 方位　N－81°－E。　◎重複　H－10の大半と重複する。本遺構の方が新しい。　◎遺物　総数37点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

II－7号住居址（Fig. 8・12）
◎位置　X14～15、Y6～7グリッド　◎面積　4.40㎡　◎方位　N－80°－E　◎形状　東西に延びる長方形。長軸2.35m、短軸1.98m、壁高8cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎竈　東壁南寄りに設置。全長21cm、焚口幅32cm 方位　N－79°－E。◎重複　H－6に北壁の一部を切られる。
◎遺物　総数25点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀後半と考えられる。

II－8号住居址（Fig. 8　Pl. 3）
◎位置　X15、Y5グリッド　◎面積　3.71㎡　◎方位　N－68°－E　◎形状　北側部分が調査区外のため不明。長軸2.44m、短軸1.62m、壁高4cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎遺物　総数185点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

H－9号住居址（Fig. 8・12　PL. 3・8）
◎位置　X16、Y6グリッド　◎面積　7.18㎡　◎方位　N　22°　W　◎形状　東半分が撹乱により不明。長軸3.10m、短軸2.40m、壁高7cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎遺物　総数174点。土師坏、須恵高台埦、須恵高台皿などが出土。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

II－10号住居址（Fig. 8・12　Pl. 3・8）
◎位置　X14～15、Y5～6グリッド　◎面積　7.85㎡　◎方位　N－82°－E　◎形状　南北に延びる長方形。長軸3.12m、短軸2.50m、壁高1cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎竈　東壁にほぼ中央に設置。全長64cm、焚口幅29cm 方位　N－79°－E　◎重複　H－6と大半が重複しており、北側の一部が残存。本遺構の方が古い。　◎遺物　総数58点　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

(2) 土　　坑

D－1号土坑（Fig. 9　PL. 3）

◎位置　X12、Y8グリッド　◎形状　楕円形。長径78cm、短径61cm、深さ21.5cmを測る。

◎遺物　なし。　◎備考　覆土から近世の遺構と考えられる。

D－2号土坑（Fig. 9）

◎位置　X13、Y7～8グリッド　◎形状　楕円形。長径74cm、短径62cm、深さ12.5cmを測る。

◎遺物　総数25点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

D－3号土坑（Fig. 9）

◎位置　X13、Y7グリッド　◎形状　円形。長径68cm、短径67cm、深さ12.5cmを測る。

◎遺物　総数13点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

(3) 溝

W－1号溝（Fig. 9　PL. 3）

◎位置　X9～10、Y6～9グリッド　◎方位　N－19°－W　◎形状等　調査区西端に位置し、南北に横切る。断面はU字形を呈し、上幅58cm～68cm、下幅36cm～46cm、深さ17.5cm～26cm、長さ15.60mを測る。　◎遺物　総数6点。　◎備考　覆土や出土遺物から近世の遺構と考えられる。

W－2号溝（Fig. 9　PL. 3）

◎位置　X10～11、Y6～9グリッド　◎方位　N－18°－W　◎形状等　調査区西部を南北に横切る。断面はU字形を呈し、上幅96cm～132cm、下幅40cm～58cm、深さ19cm～40.5cm、長さ12.60mを測る。　◎重複　W－3に切られる。本遺構の方が古い。　◎遺物　総数114点。　◎備考　覆土や出土遺物から近世の遺構と考えられる。

W－3号溝（Fig. 9）

◎位置　X10～11、Y7～9グリッド　◎方位　N－18°－W　◎形状等　W－2号溝に接し平行して南北に横切る。断面はV字形を呈し、上幅43cm～61cm、下幅14cm～24cm、深さ20.5cm～39.5cm、長さ12.59mを測る。　◎遺物　なし。　◎備考　本遺構の時期は不明。

W　4号溝（Fig. 9・12　PL. 3）

◎位置　X10、Y7～9グリッド　◎方位　N－5°－W　◎形状等　調査区西部に位置し、南北方向に走っているが北側部分はW－2号溝によって切られている。断面はV字形を呈し、上幅80cm～94cm、下幅30cm～48cm、深さ27cm～31cm、長さ7.82mを測る。　◎重複　W－2号溝に切られる。本遺構の方が古い。　◎遺物　総数103点。　◎備考　覆土や出土遺物から9世紀末の遺構と考えられる。

(4) グリッド等出土遺物

主に奈良・平安時代遺構面から小破片を含め総数13,418点の遺物が出土した。

2 考　　察

(1) 平安時代の遺構と遺物について

本遺跡地は端気川右岸に接する微高地に立地する。調査区のほぼ全域から竪穴住居址を中心とする平安時代の遺構が検出された。当該期遺構は竪穴住居址10軒、土抗２基、溝１条が検出され、集落の一部の様相を呈する。以下は遺構、出土遺物の概要である。

出土した遺物などから、これらの住居群は９世紀第３四半期から同第４四半期までという、ごく短い期間に営まれたものであることが言える。最も早い時期に形成されたと考えられるのがＨ－１・７の２軒で９世紀第３四半期に該当する。他の住居址は全て９世紀第４四半期と考えられる。住居の形状は方形のものと、縦長若しくは横長の長方形を呈し、竈の位置は東壁中央寄りか南壁寄りに設置される。住居の規模は、長軸4.42ｍ、短軸3.75ｍ、面積16.41㎡のＨ－１が最大で、長軸2.35ｍ、短軸1.98ｍ、面積4.40㎡のＨ－７が最小である。全体の規模がほぼ把握できるＨ－１～４・６・７・10の平均値は長軸3.38ｍ、短軸2.86ｍ、面積9.82㎡である。住居の傾きはおおよそ一定のもので、住居の各辺がほぼ正方位と平行若しくは垂直の関係にある。次に集落域の問題であるが、Ｈ－１～３のラインから西に住居が検出されないことから集落の西限の可能性がある。東西軸Ｙ７ラインあたりを境として北側に住居が集中することから、さらに北側に集落が続くと想定される。Ｙ７ラインから南側は、遺物片の散布が認められたが竪穴住居は少なく、広場か倉庫などの雑舎を配置したスペースであろうか。いずれにしてもさらに南に集落が広がることも考えられる。調査区東端部は大きく撹乱されているが、Ｈ－９などが検出されていることから、さらに東の端気川右岸まで集落が伸びる可能性がある。端気川については自然流路なのか人工的に開削されたものなのか、また、いつ頃から存在していたものなのかは明らかではないが、周辺遺跡で検出されている条里制の名残をとどめる水田跡は、大規模な用水路（端気川）を活用して形成された可能性が高いと言える。

Ｗ－４は調査区をほぼ真北から真南に走行する小規模な溝で、断面Ｖ字形を呈し、幅80～94㎝、深さ27～31㎝を測る。出土した遺物は９世紀末のものが多く、住居群とほぼ同時期のものと考えられる。Ｗ－４はＨ－１・２・３の西にあり、それ以西には住居は確認されないことから、集落西限の区画溝的性格を持つものであろうか。その他の該期遺構としては若干の土器片を含む土坑が２基検出された。

最後に本集落がなぜ９世紀後半の約半世紀と言う短い期間に出現し消滅したかについて言及しておきたい。まず、出現期の問題だが、本県の事例では９・10世紀は群郷制再編期で集落遺跡が増加する時期であり、言い換えれば人口が急増したと考えられる時期といえる。本遺跡もそれに符合し９世紀後半期に集落が新たに形成された例と想定される。遺跡周辺では広瀬・朝倉地区の古墳群が知られており、その周辺に集落が形成されたが、奈良時代の律令制の浸透に伴い、徐々に古墳周辺以外の土地活用が行われるようになり新規の用水路が開設され、条理水田が形成されるとともに集落が拡大されていったと考えられる。

次に消滅時期についてであるが、天災に委ねるところが大きいのではないかと考えられる。調査区壁面の土層を観察すると、平安時代遺構確認面の上層にラミナ状の洪水に関係するものと思われる層が散見されている。調査区東側に接し、現在も用水路として活用されている端気川がその要因になった可能性がある。河川が近くに無いとしても、遺跡地は後背湿地に囲まれた僅かな微高地であり、水害の影響を蒙る可能性は非常に高かったであろうと想定される。水害を受けた集落は、その後復旧されずに他所へ移動したと考えられる。次に本地域が活用されるのは中・近世まで俟たねばならない。以

上のような理由で本遺跡の集落が短期間のうちに出現し、また消滅していったと考えられる。

(2) そ の 他

以上のように本遺跡は主に平安時代の遺構群（９世紀第３四半期～第４四半期の集落跡の一部）により構成されることが判明したが、それ以外の時期の遺構も若干存在する。D　1、W－１・２・３がそれで、W－３を除く遺構の覆土は軽石に富むものである。覆土中の軽石は観察の結果、浅間Ａ軽石と考えられる。時期決定の指標となりうる遺物は殆ど検出されなかったが、土層から近世以降の所産と考えたい。W－１とW－２は平行して走行しており、２条一組の道路側溝の可能性がある。W－３はW－２を切っているため後者より新しいが、軽石を含まず遺物も無いため時期決定には至らなかった。

Tab. 1　鶴光路榎橋Ⅱ遺跡土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	胎土	焼成	色調	残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考	Fig.
1	H－1	土師台付甕	[12.1]	－	中粒	良好	橙	2／3	口縁部は開い「コ」の字を呈し横撫で。胴部下位は緩く外傾し、中位から上位にかけて内湾して丸みを持つ。胴部二位で横方向の箆削り、下位では縦方向の箆削り。脚は欠損。		10
2	H－1	土師甕	－	－	中粒	良好	にぶい赤褐	1／8	底部は平底で、胴部下位はやや丸みを持ち外傾する。底部下位は縦方向の箆削り、底部に箆至り後撫で。器壁は薄い。		10
3	H－1	土師坏	11.6	3.0	細粒	良好	にぶい橙	ほぼ完形	底部は中央付近で張り上がり、体部は浅く、口縁にかけて直線的に開く。底部から体部は箆削り、口縁横撫で。内面は撫で及び指頭調整が見られる。		10
4	H－1	土師坏	[13.8]	3.0	中粒	良好	にぶい橙	1／2	体部から口縁部にかけて直線的に開き、底部は平底を呈する。口縁部は横撫でで体部は横方向の箆削り、底部も箆削りを施す。		10
5	H－1	土師坏	12.1	4.0	中粒	良好	橙	ほぼ完形	底部値かに丸みを持ち、体部から口縁にかけて直線的に開く。口縁部は横撫で、内湾する。底部から体部にかけ箆至り。内面撫で、指頭調整。		10
6	H－1	土師坏	12.5	3.1	細粒	良好	にぶい橙	胴・口縁は完形	体部から口縁部にかけ、直線的に開き底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部・体部は箆削り。内面は撫で調整。		10
7	H－1	土師坏	12.4	3.7	細粒	良好	橙	完形	体部から口縁部にかけて直線的に開き、底部やや丸みを帯びる。口縁部は横撫で、体部から底部は箆削りを施す。内面撫で、指頭調整。		10
8	H－1	土師坏	11.6	3.1	細粒	極良	にぶい橙	5／6	底部はほぼ平坦で体部は浅く、緩く内湾する。口縁は僅かに外反し、口唇が短く直立する。口縁部横撫で、底部から体部にかけ箆削り。内面は撫で。		10
9	H－1	須恵高台塊	15.0	6.3	細粒	極良	橙 灰	ほぼ完形	轆轤成形。体部から口縁部にかけ緩やかに内湾し、あまり開かない。底径は広く、高台は断面四角形で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り未調整。		10
10	H－1	土師坏	12.1	3.1	中粒	良好	橙	完形	体部から口縁部にかけて歪み気味に直線的に開く。底部は平底を呈する。口縁部横撫で、底部から体部にかけて箆削り。内面は撫で、指頭調整。		10
11	H－1	須恵高台塊	[13.7]	5.2	中粒	良好	灰	1／3	轆轤成形。体部から口縁部にかけ緩く外傾し、口唇部で短く外反する。底部は回転糸切り未調整。高台は、端部に丸みを持ち「ハ」の字状に開く。		10
12	H－1	須恵高台塊	[12.6]	6.8	細粒	良好	灰	1／3	轆轤成形。体部から口縁部にかけて緩く内湾する。底部は回転糸切り未調整、高台は逆台形でやや外に開く。		10
13	H－1	灰柱高台塊	14.2	4.7	中粒	良好	灰 白	2／3	轆轤成形。体部はやや浅く、口唇部で外反する。底部は回転糸切り後撫で、高台は逆台形を呈し端部は丸みを持つ。施釉は内面のみで刷毛塗り。	黒笹90号窯式 9 C 後	10

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	胎土	焼成	色調	残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考	Fig.
14	H－1	須恵埦	[14.8]	4.9	細粒	良好	灰	1／2	軟軟成形。体部から口縁部にかけて緩く内湾し、端部で開く外反する。底部は回転糸切り未調整。		10
15	H－1	灰釉高台皿	[14.4]	2.1	中粒	良好	灰白	1／3	軟軟成形。口縁部は外反し、高台は断面四角形を呈し、直立する。底部は回転糸切り後、周囲で調整。	光ケ丘1号窯式9C後	10
16	H－1	須恵埦	14.5	5.9	細粒	良好	灰	3／4	軟軟成形。口縁部は僅かに外反し、体部は緩やかに内湾する。底部は回転糸切り未調整。		11
17	H－1	土師坏	12.4	3.7	中粒	良好	橙	4／5	体部から口縁部にかけ、僅かに内湾気味に開き、底部はやや丸みを持つ。体部及び底部は箆削りを施す。口縁横撫で、内面は撫で、指頭調整。		11
18	H－2	須恵高台皿	13.2	3.6	中粒	良好	暗赤灰	3／4	軟軟成形。口縁部は外反し、体部は緩めで直線的に開く。底部は回転糸切り未調整。高台は断面四角形で端部は丸みを持ち「八」の字状に開く。		11
19	H－2	土師高台埦			細粒	良好	にぶい橙	1／2	軟軟成形。体部緩く内湾、高台は断面逆台形で端部丸みを持ち、僅かに開く。底部は回転糸切り未調整。		11
20	H－2	須恵坏	12.7	4.1	細粒	極良	灰白	4／5	軟軟成形。体部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。底部は平底を呈し、回転糸切り未調整。		11
21	H－2	須恵坏	12.8	3.8	細粒	良好	灰白	3／4	軟軟成形。口縁部はやや丸みを持ち開く。底部は回転糸切り未調整。		11
22	H－2	須恵坏	12.8	3.5	中粒	良好	灰	7／8	軟軟成形。口縁部は外反し、体形やや丸みを持ち開く。底部は回転糸切り未調整。		11
23	H－2	土師坏	12.2	4.0	中粒	良好	橙	5／6	体部から口縁部にかけて直線的に開き、底部は僅かに丸みを持つ。口縁部横撫で。底部・体部は箆削り、内面は撫で、指頭調整。		11
24	H－2	須恵皿	15.4	2.2	細粒	良好	灰	1／2	軟軟成形。口縁部外反し、口唇部は丸みを持つ。体部は直線的に開く。底部は回転糸切り未調整。		11
25	H－2	土師坏	11.4	3.2	中粒	良好	橙	3／1	体部から口縁部にかけ外反気味に開き、底部は僅かに丸みを持つ。体部は箆削り後撫で、内面は撫で調整。		11
26	H－2	須恵高台皿	13.2	2.5	細粒	良好	灰白	3／4	軟軟成形。体部は直線的に開き、口縁部やや外反する。高台は断面逆台形で直立する。底部は回転糸切り未調整。		11
27	H－2	須恵高台皿	13.5	3.1	細粒	良好	灰	4／5	軟軟成形。口縁部は外反し、体部僅かに丸みを持ち開く。高台は丸みを帯びた断面逆台形で僅かに開く。底部は回転糸切り後置調整。		11
28	H－2	土師坏	12.6	3.4	細粒	良好	橙	ほぼ完形	口縁部外反し、体部内湾気味に開き、底部は平底を呈す。口縁部横撫で、底部・体部は箆削り、内面は撫で調整。		11
29	H－2	須恵高台埦	[13.7]	6.4	中粒	良好	灰	1／6	軟軟成形。口縁部僅かに外反し、体部下半は直線的であまり開かず、下半はやや丸みを持ち開く。高台は断面逆台形で僅かに開く。底部は回転糸切り未調整。		11
30	H－3	須恵壺	21.8		中粒	良好	灰	1／8	軟軟成形。口縁部は外反し、口唇部は上下に引き出され帯を作る。胴部上位から中位にかけ丸みを持つ。胴部は回転箆削りを施す。		12
31	H－3	須恵坏	[11.0]	3.0	中粒	良好	灰	1／3	軟軟成形。口縁部は短く外反し、体部は直線的に開く。底部は平底を呈す。底部回転糸切り未調整。		12
32	H－3	土師坏	12.2	3.4	中粒	良好	橙	完形	口縁部は僅かに外反し、体部は直線的に開く。底部はほぼ平底を呈す。体部は箆削り後、指頭調整。内面は撫で、指頭調整。		12
33	H－4	須恵高台埦	[14.4]	5.6	粗粒	良好	橙	2／5	体部は下位でやや膨らみを持ち、上位から口縁部にかけて直線的に開く。高台は断面三角形で直立する。底部は回転糸切り未調整。重化気味。		12

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	胎土	焼成	色調	残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考	Fig.
34	H－4	須恵高台塊	14.7	5.7	細粒	良好	にぶい橙	3／4	輪幅成形。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。高台は丸みを持つ断面逆台形を呈し開く。底部は回転糸切り未調整。		12
35	H－6	土師坏	(13.2)	3.6	粗粒	良好	橙	2／5	体部から口縁部にかけては直線的であより開かない。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部・底部は箆削りを施す。		12
36	H－6	須恵坏	[13.0]	4.4	中粒	良好	灰黄褐	1／3	輪幅成形。体部から口縁部にかけて直線的に開き、底部は平底を呈す。底部は回転糸切り後断で調整。		12
37	H－7	土師甕	[17.2]	－	中粒	良好	橙	口縁のみ	口縁部はほぼ「コ」の字状を呈し、口唇部で直線的に開き、横撫で。		12
38	H－7	土師坏	(11.0)	3.0	中粒	良好	にぶい橙	1／5	側部から口縁部にかけて直線的に開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部横撫で。底部・側部は箆削り。内面は撫で、指頭調整が見られる。		12
39	H－9	土師坏	12.2	3.3	粗粒	良好	にぶい橙	4／5	体部から口縁部にかけて内湾し、底部は僅かに丸みを帯びる。口縁部は横撫で、底部・体部は箆削り。内面は撫で。		12
40	H－9	須恵高台塊	14.4	－	小粒	良好	オリーブ黒	ほぼ完形	輪幅成形。体部から口縁部にかけて内湾気味に開く。底部は回転糸切り未調整で高台は欠損する。内外面とも黒色処理。	黒色土器	12
41	H－9	土師坏	12.5	3.4	中粒	良好	橙	ほぼ完形	体部から口縁部にかけて直線的に開き、底部に平底を呈す。口縁部は横撫で、底部・体部は箆削り。内面は撫で、指頭調整。		12
42	H－9	須恵高台皿	(14.2)	3.1	中粒	良好	灰オリーブ	1／2	輪幅成形。口縁部やや外反し、体部は直線的に開く。高台は断面逆台形を呈し、外端部が丸みを帯びる。底部は回転糸切り未調整。		12
43	H－10	須恵高台塊	(12.8)	4.9	中粒	良好	灰	1／3	輪幅成形。口縁部は外反し、体部は下位で丸みを帯び、上位で直線的に開く。高台は断面逆台形を呈し「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り未調整。		12
44	H－10	土師坏	12.4	3.5	中粒	良好	にぶい橙	2／3	体部から口縁部にかけて直線的に開き、底部は平底を呈す。口縁部横撫で。底部・体部は箆削り。内面は撫で、指頭調整。		12
45	W－4	須恵坏	－	－	中粒	良好	灰	底部のみ	輪幅成形。体部下位は直線的に開き、底部に平底を呈す。底部は回転糸切り未調整。		12

注）表の記載は、以下の基準で行った。
① 胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。
② 焼成は、極良、良好、不良の三段階。
③ 色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）に拠った。
④ 大きさの単位は㎝であり、現存値を（　）、復元値を［　］で示した。

Tab. 2 石製品観察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	特徴	備考	Fig.
1	H－1	不明	4.2	3.1	－	12.2g	輝粒安山岩	ひょうたん型を呈す		12

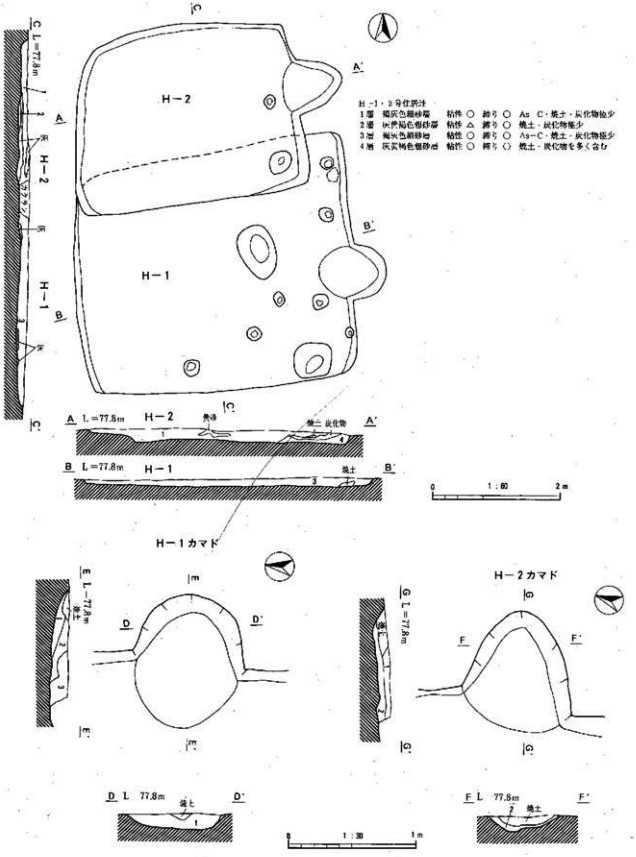


Fig. 6 H－1・2号住居址

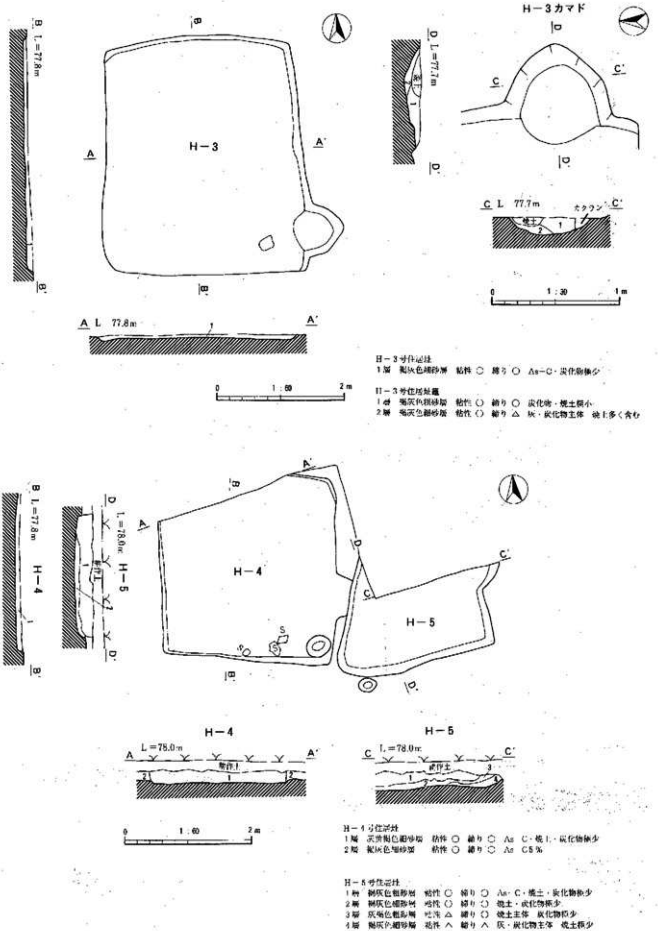


Fig. 7 H 3～5号住居址

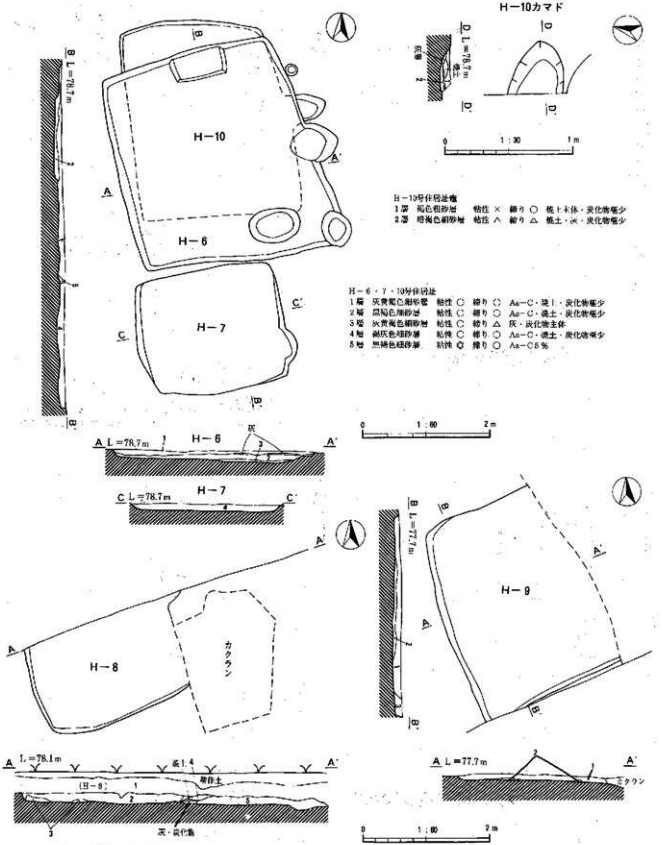


Fig. 8 H−6～10号住居址

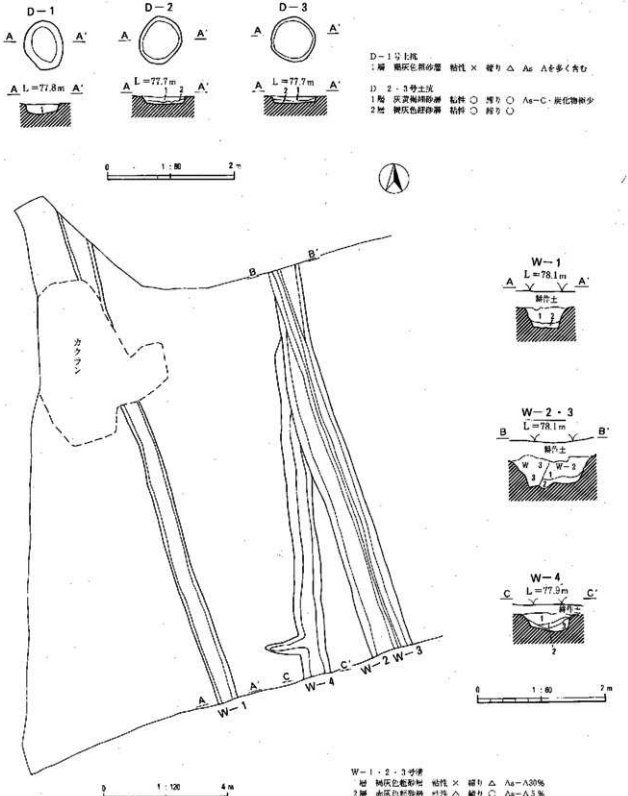


Fig. 9 D－1～3号土坑、W－1～4号溝

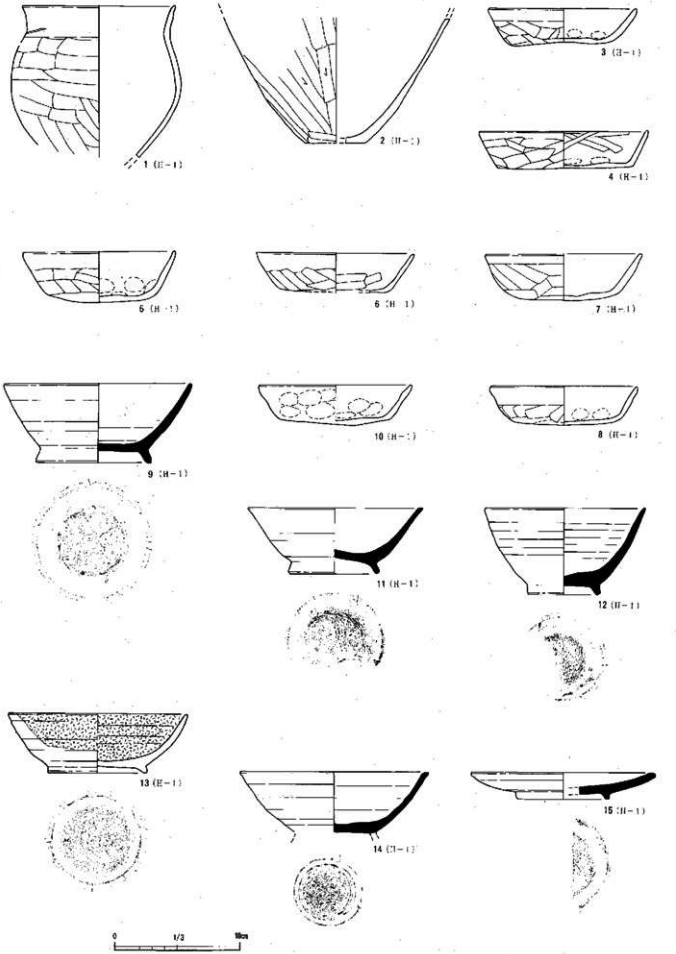


Fig. 10　H－1号住居址　出土遺物

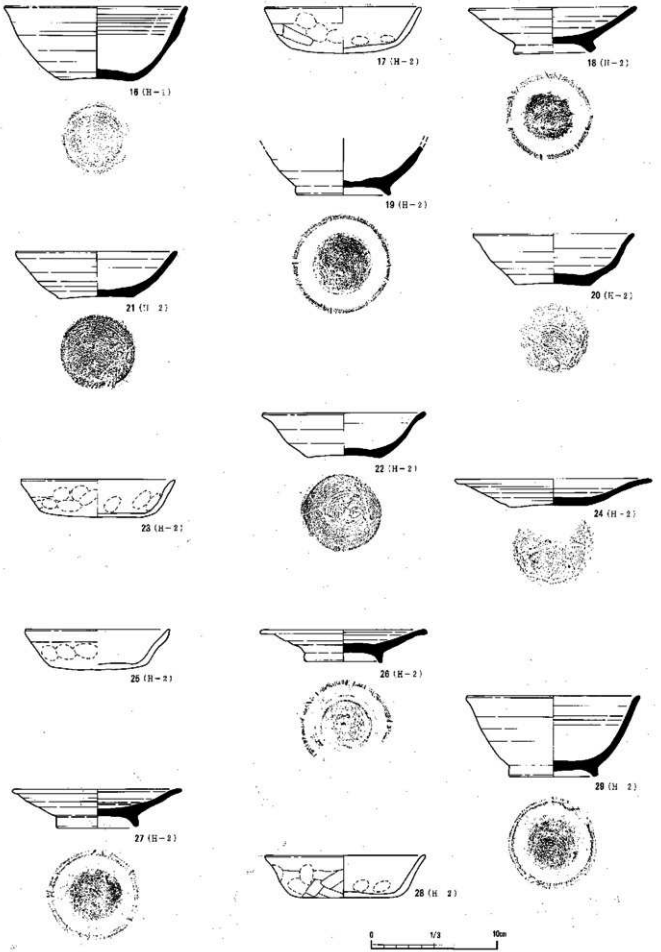


Fig. 11 H－1・2号住居址 出土遺物

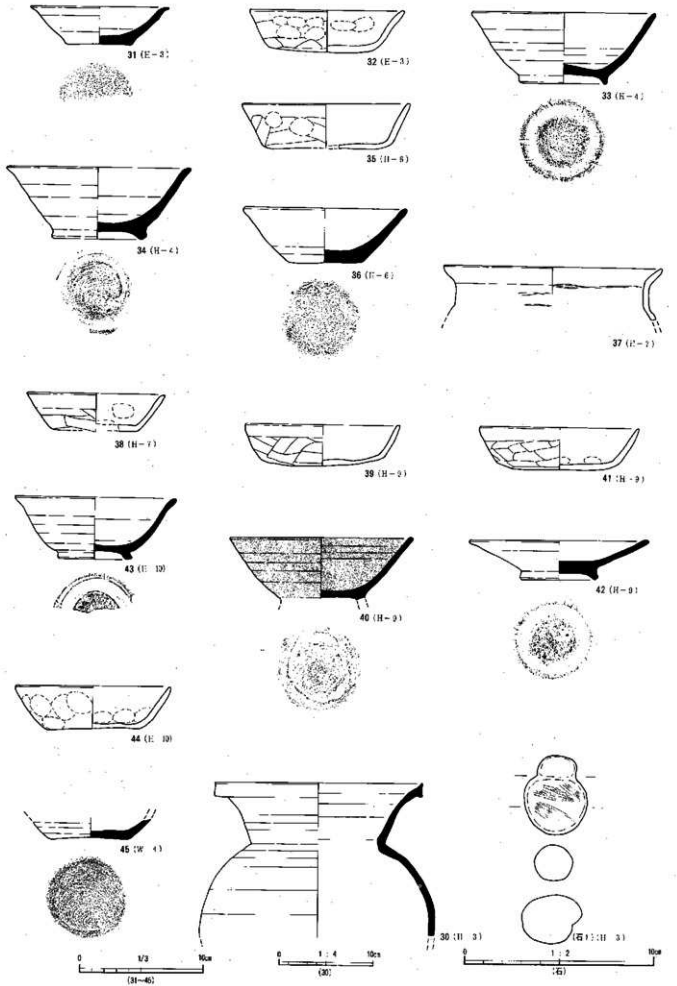
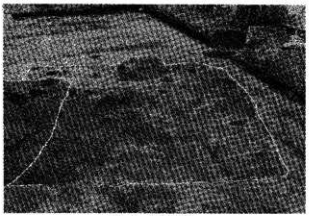
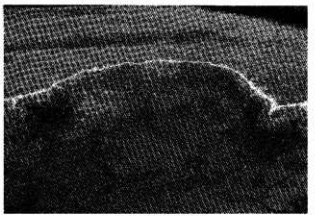


Fig. 12 II－3・4・6・7・9・10号住居址、W－4号溝 出土遺物

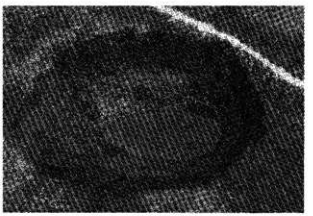
鶴光路榎橋Ⅱ遺跡東側　全景（W）



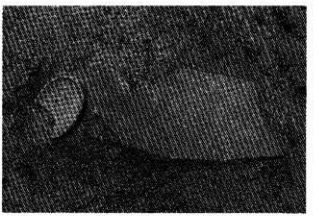
Ⅱ　1　全景（W）



H－1カマド　全景（W）

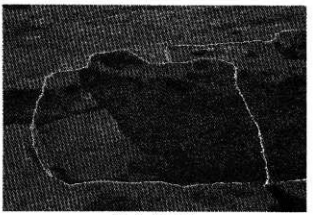


H－1貯蔵穴　全景（NW）

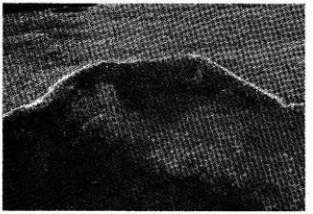


H－1　遺物出土状態（W）

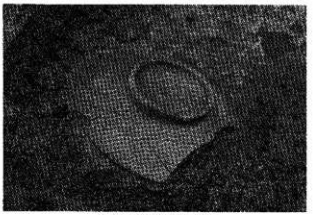
H－1・2　全景（W）



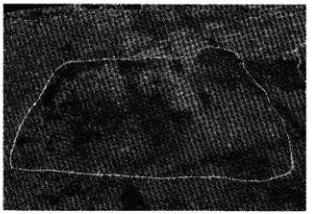
H－2　全景（W）



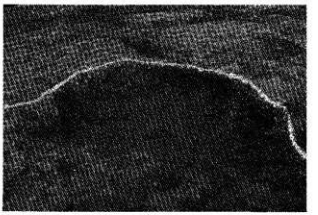
H　2カマド　全景（W）



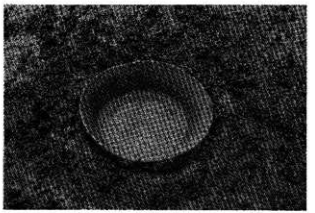
H－2　遺物出土状態（S）



H－3　全景（W）

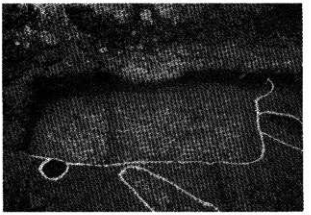


H－3カマド　全景（W）

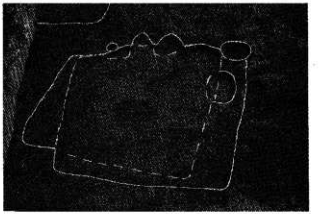


H－3　遺物出土状態（S）

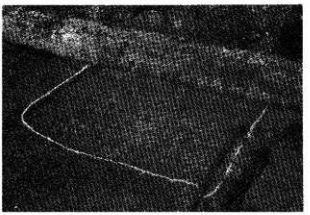
H－4　全景（W）



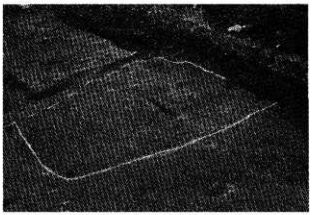
H－5　全景（S）



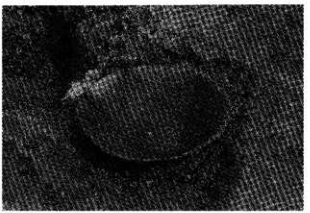
H－6、10　全景（W）



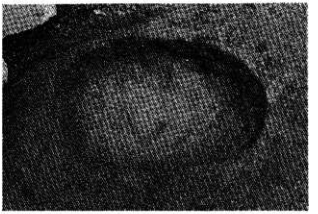
H－8　全景（SE）



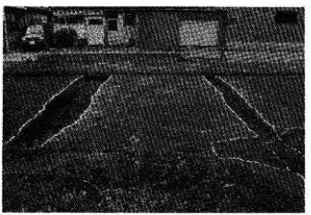
H－9　全景（W）



H－9　遺物出土状態（W）



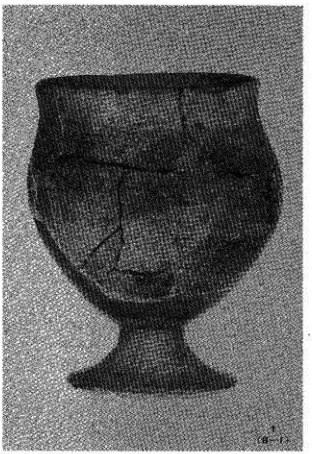
D－1　全景（E）

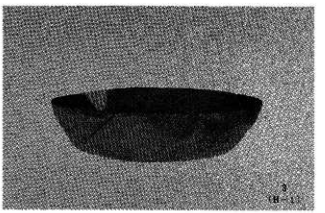


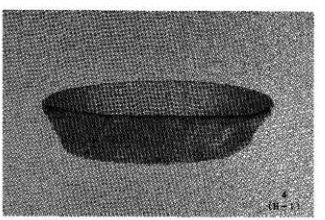
W－1、2　全景（K）

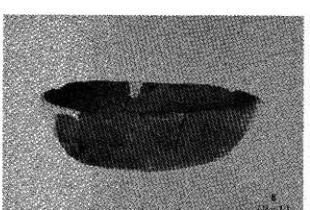
W－4　全景（N）

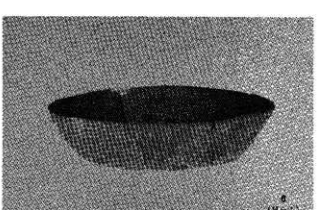
PL. 4

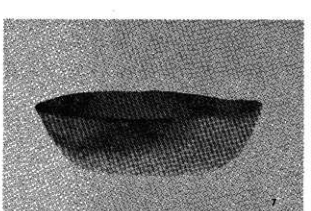


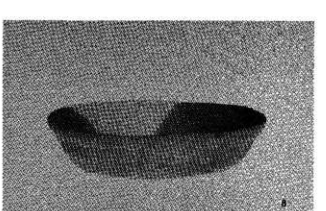


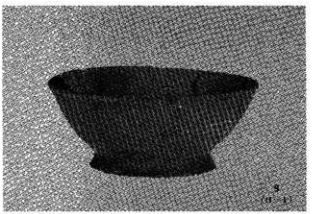


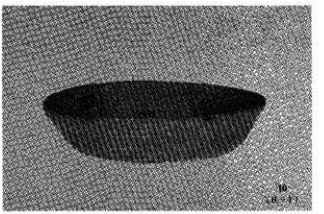


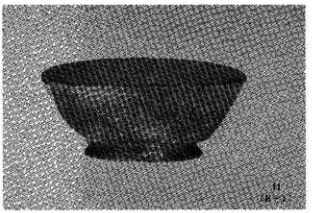


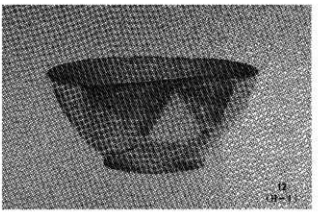


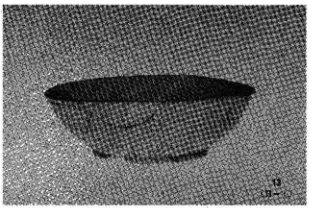


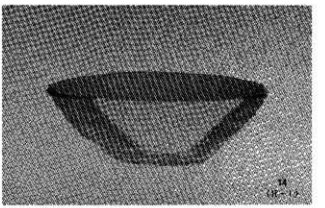


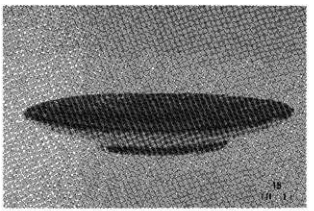


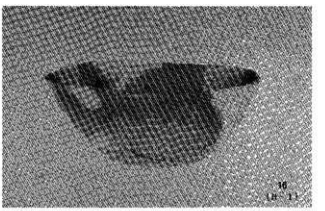




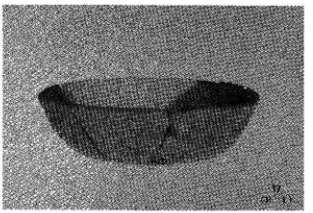


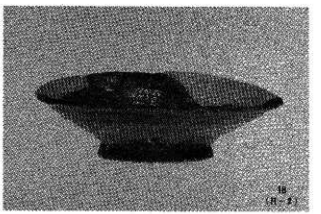


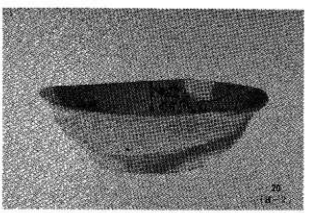


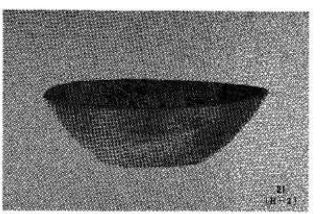


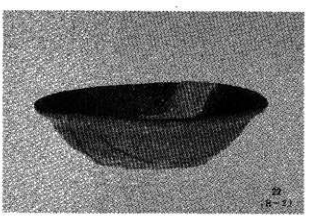
PL. 6

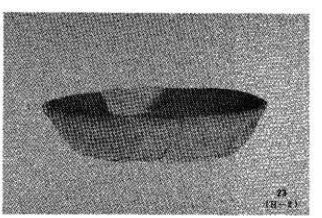


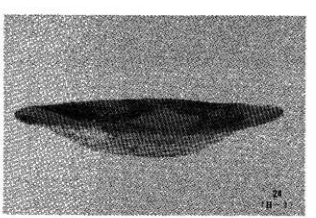


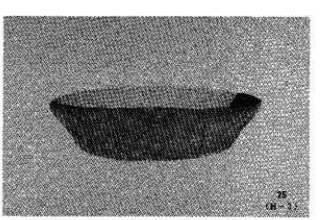


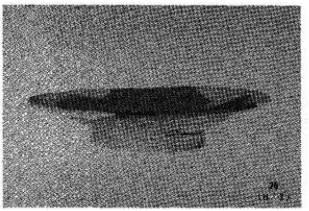


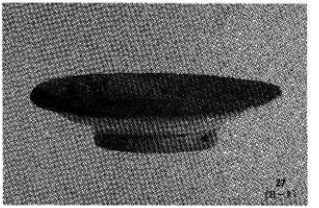


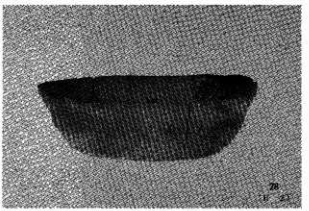


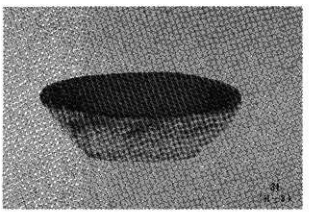


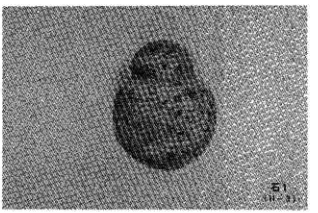


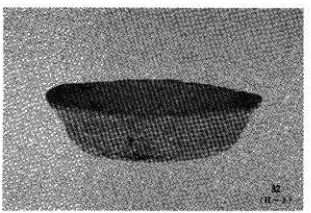


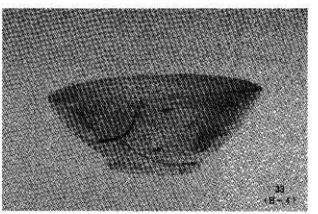


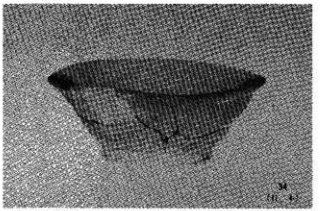


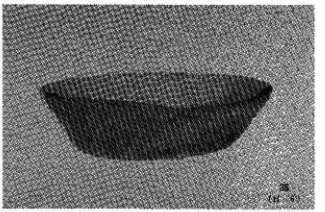


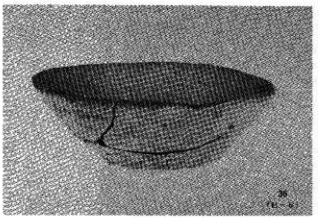


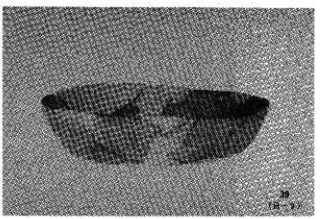


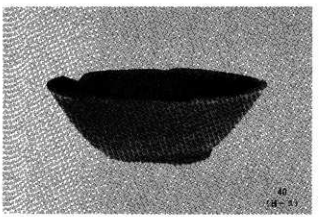


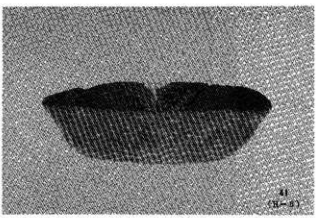


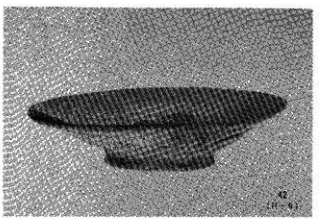


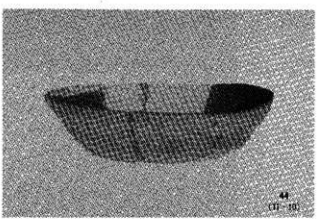












徳丸高堰Ⅲ遺跡

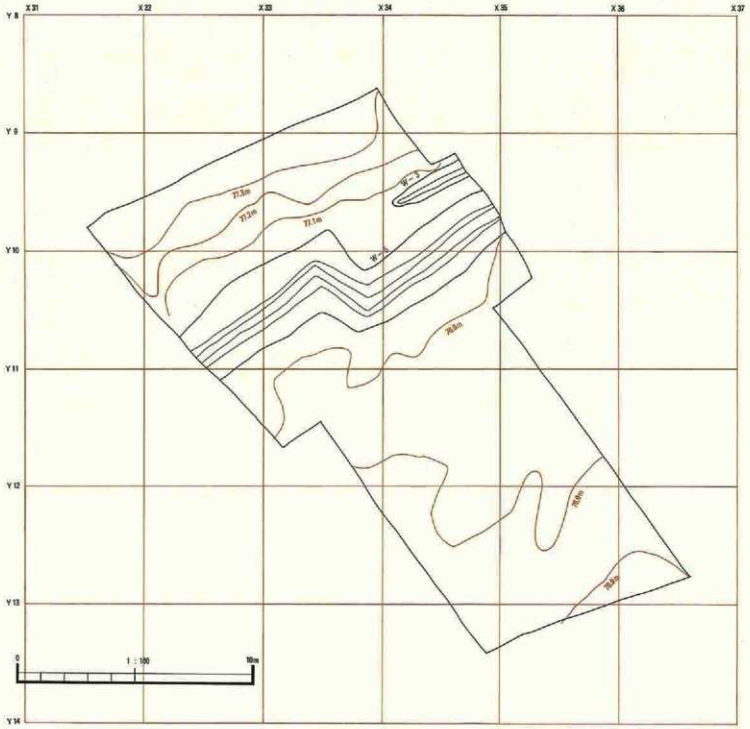


Fig. 13 徳丸高塚Ⅲ遺跡A区全体図

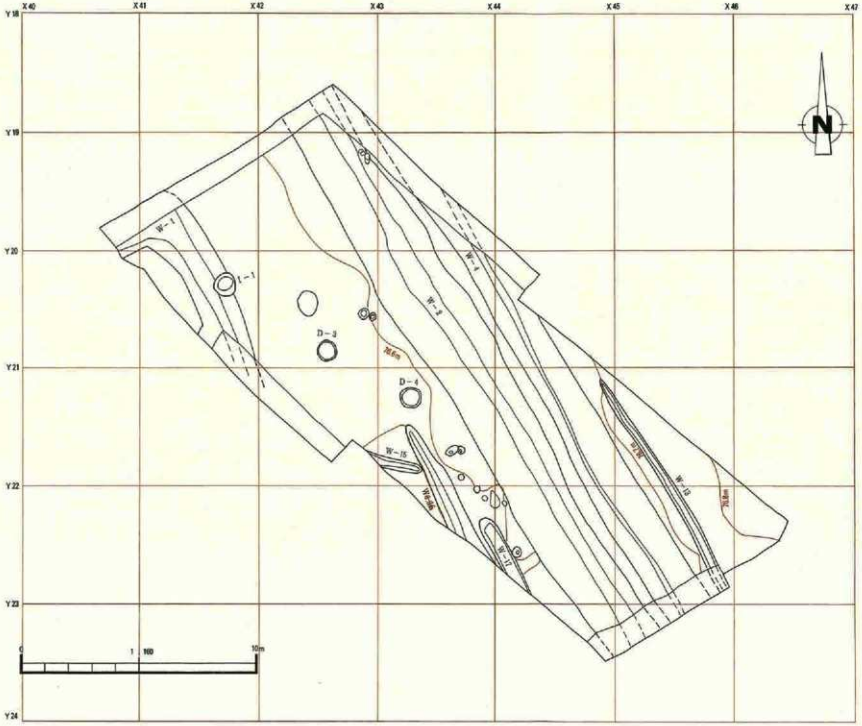


Fig. 14 徳丸高堰Ⅲ遺跡B区全体図

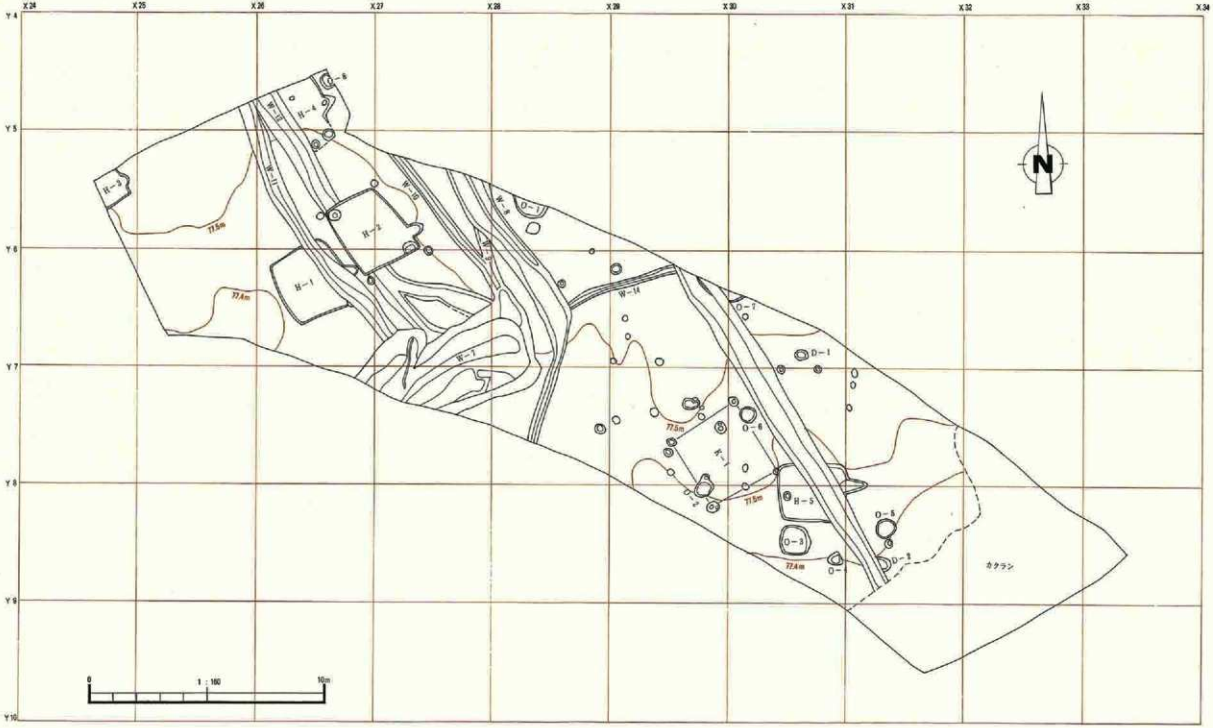


Fig. 15 徳丸高堰Ⅲ遺跡C区全体図

V　徳丸高堰Ⅲ遺跡

1　遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址5軒、掘立柱建物1棟、土坑4基、井戸1基、溝17条、落ち込みが8基である。

調査区は端気川東側A～C区の3カ所で、A区は宅地、B及びC区は畑作地である。

A区で検出された遺構は、溝が2条である。うち1条は、V字ないしY字の薬研堀と考えられ、溝内から焙焼型の内耳土器や陶器碗などが出土しており、近世の遺構と考えられる。また、本調査区が位置する前橋市南部地区においては環濠屋敷跡が多く見られ、本例もそれに類したものである可能性がある。

B区は本遺跡中最も標高の低い箇所であり、検出された遺構は中世から近世にかけての溝が中心で、その他井戸等が確認されている。

C区は端気川を挟んだ西側の鶴光路板橋Ⅱ遺跡と地形的に類似しており、A区、B区が中・近世遺構が多いのに対し、本調査区は平安時代のものが主となる。東壁に竈を持つ竪穴住居址が5軒検出され、出土した遺物から10世紀のものと考えられる。また、雑舎と思われる掘立柱建物址1棟の他に溝も多く確認されている。なかでも、幅約3.5m、深さ約70cmを測る最も大規模な溝は、底部や傾斜に石が積まれていた形跡があり、それが崩落したと思われる大量の石が底部から見つかっている。本調査区内の溝のほとんどが本遺構に流れ込んでおり、さらにそこからより大規模な溝（端気川の前身か）へと通じていた可能性がある。

(1)　竪穴住居址

H－1号住居址（Fig. 16・23　PL. 10・17）

◎位置　X26、Y6グリッド　◎面積　8.53㎡　◎方位　N－64°－E　◎形状　正方形。長軸3.06m、短軸3.00m、壁高2cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。住居東隅に貯蔵穴を検出。　◎竈　東壁のやや南寄りに設置。全長69cm、焚口幅42cm　方位　N－62°－E。　◎重複　W－11に切られる。

◎遺物　総数32点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

H－2号住居址（Fig. 16・23・27　PL. 10・23）

◎位置　X26～27、Y5～6グリッド　◎面積　8.71㎡　◎方位　N－64°－E　◎形状　北西から南東方向の長方形。長軸3.28m、短軸2.71m、壁高2cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。住居の外側四隅に柱穴を検出。また、住居内の東隅と西隅に貯蔵穴を2基検出。　◎竈　東壁南寄りに設置。全長63cm、焚口幅41cm　方位　N－59°－E。◎重複　W－12を切っている。　◎遺物　総数173点。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

H－3号住居址（Fig. 17　PL. 11）

◎位置　X24、Y5グリッド　◎面積　1.62㎡　◎方位　N－61°－E　◎形状　大部分が調査区外のため不明。長軸1.30m、短軸1.25m、壁高3.5cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。　◎竈　東壁に設置。全長27cm、焚口幅44cm　方位　N－62°－E。　◎遺物　総数5点。

H－4号住居址（Fig. 17・23　PL. 11・17）

◎位置　X26、Y4～5グリッド　◎面積　4.17㎡　◎方位　N－61°－E　◎形状　東側が溝に切られているため不明。長軸2.86m、短軸1.56m、壁高5cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。東壁の南端に貯蔵穴を検出。　◎竈　東壁に設置。全長63cm、焚口幅45cm　方位　N－64°－E。　◎重複　W－12に切られる。　◎遺物　総数82点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

H－5号住居址（Fig. 17・23　PL. 11・17）

◎位置　X30～31、Y8グリッド　◎面積　7.40㎡　◎方位　N－91°－E　◎形状　正方形。長軸2.87m、短軸2.44m、壁高6cm。　◎床面　ほぼ平坦な床面。住居南東の隅に貯蔵穴を二基検出。◎竈　東壁やや北寄りに設置。全長100cm、焚口幅42cm　方位　N－86°－E。　◎重複　W－6に切られる。　◎遺物　総数424点。　◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は9世紀末と考えられる。

(2)　掘立柱建物

K－1号掘立柱建物（Fig. 18　PL. 11）

◎位置　X29～30、Y7～8グリッド　◎面積　10.63㎡　◎方位　N－32°　W　◎形状等　東西3.14m、南北3.36mの方形を呈す。柱間寸法は南北の西辺3.24m、東辺3.46m。東西は北辺3.18m、南辺3.11mである。　◎柱穴　6基の柱穴を検出。ほぼ円形の平面を呈し、掘方の断面は円筒形に近い。長径28～58cm、短径26～49cm、深さ7.5～24.5cm、底面標高77.72m～77.84mを測る。

(3)　土　　坑

D－1号土坑（Fig. 18）

◎位置　X30、Y7グリッド　◎形状　楕円形。長径53cm、短径41cm、深さ24cmを測る。
◎遺物　なし。　◎備考　覆土から平安時代の遺構と考えられる。

D－2号土坑（Fig. 18）

◎位置　X31、Y8グリッド　◎形状　楕円形。長径77cm、短径62cm、深さ6.5cmを測る。
◎遺物総数20点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

D－3号土坑（Fig. 18）

◎位置　X42、Y20グリッド　◎形状　円形。長径88cm、短径80cm、深さ21.0cmを測る。
◎遺物　なし。

D－4号土坑（Fig. 18）

◎位置　X43、Y21グリッド　◎形状　円形。長径94cm、短径92cm、深さ33.0cmを測る。
◎遺物　なし。

(4)　井　　戸

I－1号井戸（Fig. 18　PL. 11）

◎位置　X41～42、Y19～20グリッド　◎形状　円形。長径98cm、短径88cm、深さ151cmを測る。

◎遺物　なし。　◎備考　本遺構の時期は不明。

(5)　　溝

W　1号溝（Fig. 19・23・27・29　PL. 12・17・18・22）

◎位置　X41～42、Y19～20グリッド　◎方位　N－19°－W　◎形状等　B区西部に位置し、調査区内ではその一部が確認されるのみで形状ははっきりしないが、北西から南東方向に走りB区西角でほぼ直角に西へ折れ曲がっている。断面はU字形を呈し、上幅170cm～232cm、下幅40cm～88cm、深さ43cm～53.5cm、長さ10.08mを測る。◎遺物　総数125点。擂鉢、土師質皿などが出土。　◎備考　覆土や出土遺物から中世の遺構と考えられる。

W－2号溝（Fig. 19・24・28・29　PL. 13・18・22・23）

◎位置　X42～45、Y18～22グリッド　◎方位　N－28°－W　◎形状等　B区を南北の対角線状に横切る。断面はU字形を呈し、上幅260cm、下幅42cm～100cm、深さ53cm～76.5cm、長さ25.61mを測る。　◎重複　W－4に切られる。本遺構の方が古い。　◎遺物　総数256点。土師質皿、内耳鍋が出土。また、五輪塔の一部（空風輪や水輪）が数点出土。　◎備考　覆土や出土遺物から中～近世の遺構と考えられる。

W－3号溝（Fig. 20・24　PL. 13・19）

◎位置　X34、Y9グリッド　◎方位　N　62°　E　◎形状等　A区東側に位置するが、途中で途切れている。断面はU字形を呈し、上幅44cm～82cm、下幅17cm～24cm、深さ10cm～24cm、長さ3.33mを測る。　◎遺物　総数72点。灰釉埦、油受皿などが出土。　◎備考　覆土や出土遺物から近世の遺構と考えられる。

W－4号溝（Fig. 19・29　PL. 13・23）

◎位置　X43～45、Y19～22グリッド　◎方位　N　30°　W　◎形状等　B区内をW　2号溝に東側で接し平行する形で横切っている。断面はU字形を呈し、上幅303cm、下幅44cm～79cm、深さ85.5cm～95cm、長さ19.41mを測る。　◎重複　W－2を切る。　◎遺物　総数193点。　◎備考　出土遺物から近・現代の遺構と考えられる。

W－5号溝（Fig. 20・24・25・29　PL. 14・19・20・21・23）

◎位置　X32～35，Y9～11グリッド　◎方位　N－52°－E　◎形状等　A区を東西に横切る。またA区のほぼ中央でクランク状に折れ曲がっている。断面はY字またはV字形を呈し、上幅202cm～322cm、下幅30cm～50cm、深さ50.5cm～90cm、長さ15.61mを測る。　◎遺物　総数126点。陶磁器片が多数出土。その他、内耳焙烙等も見られた。　◎備考　覆土や出土遺物から近世の遺構と考えられる。

W－6号溝（Fig. 20・25）

◎位置　X29～31、Y6～9グリッド　◎方位　N－32°－W　◎形状等　C区東側に位置し、南北に走り南部分は撹乱に切られている。断面はU字形を呈し、上幅62cm～140cm、下幅30cm～76cm、深さ10.5cm～15.5cm、長さ15.71mを測る。　◎重複　H－5を切っている。　◎遺物　総数189点。

◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

W－7号溝（Fig. 21・25・26・27　PL. 15・16・21・23）
◎位置　X26～28、Y6～7グリッド　◎方位　N－64°－E　◎形状等　C区の中央に位置し南西に延びている。本遺跡中で最も大規模な溝で、底部には当時岸面を覆っていたであろうと思われる大量の石が確認された。また、本遺構には他の溝が数条流れ込んでいたと考えられる。断面はU字形を呈し、上幅328cm～494cm、下幅20cm～76cm、深さ66cm～94cm、長さ6.27mを測る。　◎重複　W－10、W－11、W－12。　◎遺物　総数8,126点。須恵高台埦、灰釉高台皿、坏などが出土。　◎備考　覆土や出土遺物から9世紀末の遺構と考えられる。

W－8号溝（Fig. 21・26　PL. 16・21・23）
◎位置　X27～28、Y5～7グリッド　◎形状等　C区中央で、W－7を回り込む形で南北に走る。断面はU字形を呈し、上幅36cm～138cm、下幅12cm～82cm、深さ8.5cm～34cm、長さ11.88mを測る。　◎重複　W－9を切る。　◎遺物　総数460点。土師台付甕などが出土。　◎備考　覆土や出土遺物から9世紀末～10世紀初頭の遺構と考えられる。

W－9号溝（Fig. 21）
◎位置　X27～28、Y6グリッド　◎方位　N－15°－W　◎形状等　上幅48cm～60cm、下幅20cm～30cm、深さ22cm、長さ1.51mを測る。　◎遺物　総数80点。　◎備考　9世紀後半か？

W－10号溝（Fig. 21）
◎位置　X27～28、Y5～6グリッド　◎方位　N－37°－W　◎形状等　C区西側北壁から南東方向に延び、W－7に注ぐ。上幅42cm～60cm、下幅16cm～20cm、深さ12cm～25cm、長さ6.58mを測る。　◎遺物　総数28点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

W－11号溝（Fig. 21）
◎位置　X26～27、Y5～6グリッド　◎方位　N－37°－W　◎形状等　C区西側で北西の壁から南東方向に延び、W－7に注ぐ。断面はU字形を呈し、上幅56cm～99cm、下幅15cm～38cm、深さ6.5cm～15.5cm、長さ11.56mを測る。　◎重複　H　1を切る。　◎遺物　総数16点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

W－12号溝（Fig. 21・26）
◎位置　X26～27、Y5～6グリッド　◎方位　N－31°－W　◎形状等　W－11にほぼ並行する形で北西壁から南東方向に走りW－7に注ぐ。断面はU字形を呈し、上幅58cm～114cm、下幅22cm～60cm、深さ7.5cm～20cm、長さ13.00mを測る。　◎重複　II－2に切られる。　◎遺物　総数84点。長頸壺の口縁部が出土。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

W－13号溝（Fig. 19・27　PL. 16）
◎位置　X15～16、Y20～22グリッド　◎方位　N－33°－W　◎形状等　B区東側南東壁から北西に延び、途中で途切れる。断面はU字形を呈し、上幅28cm～44cm、下幅12cm～24cm、深さ5cm～

13cm、長さ9.25mを測る。◎遺物　総数3点。　◎備考　覆土や出土遺物から江戸時代の遺構と考えられる。

W－14号溝（Fig. 21）
◎位置　X28～29、Y6グリッド　◎方位　N－75°－E　◎形状等　C区のほぼ中央で東西に走る。上幅30cm～38cm、下幅12cm～18cm、深さ5.5cm～11.5cm、長さ4.92mを測る。　◎重複　W－6、W8に切られる。　◎遺物　なし。　◎備考　覆土から平安時代の遺構と考えられる。

W－15号溝（Fig. 22　PL. 16）
◎位置　X43、Y21グリッド　◎方位　N－79°－W　◎形状等　B区中央の西壁から東へ向かって延び、W－16に接する。上幅38cm～50cm、下幅16cm～30cm、深さ15cm～28cm、長さ2.06mを測る。◎重複　W－16に切られる。　◎遺物　なし。　◎備考　遺構の時期は不明。

W－16号溝（Fig. 22　PL. 16）
◎位置　X43～44、Y21～22グリッド　◎方位　N－27°－W　◎形状等　B区中央西側に位置し、南北方向に走り北側は途切れる。上幅44cm～96cm、下幅18cm～28cm、深さ15.5cm～27cm、長さ5.29mを測る。　◎重複　W－15を切る。　◎遺物　総数2点。　◎備考　遺構の時期は不明。

W－17号溝（Fig. 22　PL. 16）
◎位置　X44、Y21～22グリッド　◎方位　N　30°　W　◎形状等　W－16の東側で並行するが、北側は途切れる。断面はV字形を呈し、上幅80cm～86cm、下幅42cm～49cm、深さ12.5cm～26cm、長さ3.07mを測る。　◎遺物　なし。　◎備考　遺構の時期は不明。

(6) 落　込　み

O　1号落込み（Fig. 22）
◎位置　X28、Y5グリッド　◎形状　北側が調査区外のため不明。長径156cm、短径67cm、深さ16cmを測る。　◎遺物　総数25点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

O－2号落込み（Fig. 22）
◎位置　X29、Y8グリッド　◎形状　不整形。長径88cm、短径64cm、深さ5cmを測る。
◎遺物　総数4点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

O－3号落込み（Fig. 22）
◎位置　X30、Y8グリッド　◎形状　正方形。長径138cm、短径132cm、深さ6cmを測る。
◎遺物　なし。　◎備考　覆土から平安時代の遺構と考えられる。

O－4号落込み（Fig. 22）
◎位置　X30、Y8グリッド　◎形状　不整形。長径56cm、短径54cm、深さ10.5cmを測る。
◎遺物　なし。　◎備考　覆土から平安時代の遺構と考えられる。

O－5号落込み（Fig. 22）
◎位置　X31、Y8グリッド　◎形状　円形。長径90cm、短径76cm、深さ5.5cmを測る。
◎遺物　総数14点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

O－6号落込み（Fig. 22）
◎位置　X30、Y7グリッド　◎形状　円形。長径71cm、短径62cm、深さ7.5cmを測る。
◎遺物　総数10点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

O－7号落込み（Fig. 22）
◎位置　X29～30、Y6グリッド　◎形状　北側が調査区外のため不明。長径203cm、短径64cm、深さ6.5cmを測る。　◎遺物　総数38点。　◎備考　覆土や出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

O－8号落込み（Fig. 22）
◎位置　X26、Y4～5グリッド　◎形状　北側が調査区外のため不明。長径64cm、短径46cm、深さ6cmを測る。　◎遺物　なし。　◎備考　覆土から平安時代の遺構と考えられる。

(7)　グリッド等出土遺物

奈良・平安時代～中・近世遺構面から小破片を含め総数3,113点の遺物が出土した。

2 考　　察

(1) 平安時代の遺構と遺物について

当該期遺構はC区で検出された。C区と、遺跡南端の微高地で同時期の遺構が検出された鶴光路榎橋Ⅱ遺跡とは端気川を挟み隣接している。検出遺構は竪穴住居址5軒、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝7条、落ち込み8基であった。

全ての住居址で竈が確認された。竈の設置位置は東壁の南寄り、または中央部付近である。出土遺物には土師器甕・杯、須恵器椀・杯などである。台付のものを含む甕類は口縁部がやや崩れた「コ」の字状を呈する。土師器杯は底径がやや小さく、体部から口縁部にかけて直線的に開く。須恵器高台付椀は器高がやや低く底径が小さい。焼成は酸化気味のものと半還元気味のものがある。本遺跡の住居群は、これらの遺物の特徴や羽釜の出土がないことから、羽釜出現以前の9世紀第4四半期のものと考えられる。

本調査区の特異な点は溝の多さと言える。なかでも特筆すべきはW－7で、溝の断面はU字形を呈し、幅3.28～4.94m、深さ66～94cm、確認長6.27mを測る。

W－7は周辺の小溝群が流れ込む地点から始まり調査区南壁に出る。小溝群が北西から南東に流れ込んでいるのに対して、本遺構は北東から南西に走行する。水の流し込み口付近の底部及び側壁から、補強に用いたと考えられる大小の石が多量に出土したことから人為性が認められる。前に述べたとおり、W－7は走行してすぐに調査区外に出るため、総延長距離は不明であるが、調査区と並走するように北西から南東に走る端気川まで延びる、或いは直交する可能性も考えられる。当該時期にすでに端気川、或いはその前身となる溝が存在したかは解明できないが、本遺構との深い関わりが想定される。この事の解明は隣接地点の今後の調査に期待するところが大きい。主な出土遺物は須恵器甕、高台付椀、杯、土師器杯、灰釉高台付皿などである。上製品では土錘が多く、図示できたものだけでも5点に上る。周辺の住居や溝でも土錘が出土しており、付近で漁労活動が行われていた可能性が高い。周知のように、土錘は漁に使用する網の錘であり、当時から漁を行う河川が近在していたことを想定させる。その河川が端気川であった可能性は高いと言える。いずれにしろ、本遺跡が河川と深い関わりを持っていたことが想像される。本遺構の遺物からは、住居址の年代と重なる9世紀末～10世紀前半の年代観が得られた。

(2) 中・近世の遺構と遺物について

中世から近世にかけての遺構はA・B区で確認された。検出遺構の内訳は土坑2基、溝6条である。W－1はB区北西隅に位置する溝で、断面U字形を呈し、上幅1.7～2.32m、深さ43～53.5cmを測る。L字形のコーナー部のみの検出であったため確認できた総延長は10.08mに止まった。溝の大部分は南西方向の調査区外にあると考えられるが、コーナー付近で少なからぬ遺物が出土し遺構の時期決定の根拠となった。

遺物は土師質皿、擂鉢、火鉢、銭貨、砥石などが出土した。銭貨以外は在地系のものが主体である。土師質皿は轆轤成形で平底を呈し、焼成状態は半還元気味のものと酸化気味のものがある。口縁はやや外に開き底径が広く器肉は薄い。体部は浅めだが器高がやや減じる段階の15世紀後半から16世紀末に収まるものと考えられる。擂鉢は還元焔焼成のため灰色に焼き締まった所謂軟質陶器である。平坦でやや丸みを帯びた口唇端部は外側に傾く。器肉はやや厚く器高は浅めで体部は外傾する。上野では

14世紀後半代に内耳土鍋が出現するが、本遺構からは検出されなかった。銭貨は中世に多く流通した渡来銭（熙寧元宝　北宋　1068年）で、皇宋通宝、元豊通宝などとともに13世紀から15世紀代を中心に江戸期まで見られるものである。これらの遺物から総合的にみた本遺構の時期は中世後期と考えられる。

B区を北西から南東に横切るW－2は、断面U字形で幅約2.6m、深さ53～76cm、長さ25.61mを測る。本遺構に平行する形で後世に造り替えられたと考えられるW－4に、東側の立ち上り部から上を壊される。底部に砂礫層が存在することや、堰状の石積み遺構が確認されたため通水していたと考えられる。遺物から本遺構は中世後期～江戸時代前期に機能していたものと考えられる。遺物は土師質皿、内耳土器、陶磁器製、石造物、砥石などである。溝底部で検出された磁器染付皿は口縁から底部にかけての破片で、高台は外底部を削り込んだ蛇の目底で砂が付着し、口縁は内湾気味である。呉須による染付部は淡青から藍で、わずかに青色を帯びた透明釉が上掛けされる。文様は内面に解読不能な文字が、外面にも何らかの文字か文様が施される。中国の主に明代で大量生産されている景徳鎮窯系の青花皿と考えられる。所産時期は15世紀後半～16世紀前半と推定される。在地系の土器では鍋型の内耳土器がある。還元焔焼成で灰色を帯びる、いわゆる軟質陶器で、胴部は深く、僅かに内湾し、断面楕円形を呈する丁寧な造りの内耳を持つ。中世後期の所産と考えられる。石造物は五輪塔が多く、空風輪4個体、水輪1個体が出土した。空風輪の一つに砂岩製のものがあり、風輪部に梵字で「因業」を意味する「カ」が刻まれており、金箔とそれを定着させる漆が残存する。五輪塔の出土量の多さは付近に墓地や寺院の存在が想定される。他には石臼が出土しており、これは磨耗が激しく片減りをしており、引き手穴の付け替えの痕跡が残る。このような使い込みかたは中世の例に多いと言われる。埋土の上層部には浅間Aテフラ（As－C，天明3年，1783年）の多く含まれる層があり、Aテフラ降下時にはおおよそ埋没していたと考えられる。出土遺物などから本遺構は中世後期～江戸時代前期に機能していたものと推定される。

W－2の一部を壊して並走するかたちで構築されたW－4は、浅間Aテフラ層を切っており、同テフラ降下以降のものと考えられる。遺物は近世の陶磁器片から現代のものまであり、当該期間に使用されていたものと考えられる。土層中には、W－4に見られた浅間Aテフラ層は認められず、近世でもAテフラ降下以降のものと考えられる。

A区で検出されたW－5は調査区南側を北東から南西に走り、中央部で鉤の手に曲がる。断面はV字状で薬研堀である。規模は、上幅2.01～3.22m、下幅30～50cm、深さ50.9～90cm、総延長15.61mを測る。溝の走行の仕方や薬研堀であることから、環濠屋敷の濠である可能性が高い。水の流れた形跡は無く、溝の東端で底部が隆起し土橋の形跡を残す。遺物は溝の西半部の南斜面寄りの底部から、なだれ落ちるように出土していることや、北側のC区で該期遺構が認められなかったため、溝の南東方向に居住域が想定される。本調査区は宅地であったため、撹乱部が多く、遺構構築層の上層が削平された上に客土されており、建物や土塁の痕跡等の確認には至らなかった。遺物は焙烙型の内耳土器が2個体、瀬戸・美濃系の陶器類、肥前系陶磁器製、砥石などが出土した。内耳土器は図知のごとく中世の遺構でよく見られる煮炊具の一種で、今回出土した2点は焙烙形のそれで口縁端調整、酸化焔焼成のものである。平底で体部がやや外傾または緩やかに内湾し外面面が黒く燻され、内耳の下端が底部に着く、ごく器高の浅いもので、17世紀（江戸期）に位置づけられる。

陶器は碗、皿、鉢などが出土した。碗では尾呂碗、京焼風碗、呉器手碗が出土した。尾呂碗は鉄または飴釉の体部に口縁部のみ白濁する灰釉を上掛けした大振りで深底の茶碗で、尾張定光寺の尾呂窯で多く産出されたことに基づき、江戸期の瀬戸・美濃地方で盛んに生産されている。呉器手碗は、

高麗茶碗のうちの「呉器手」の碗を写した肥前唐津産の陶器で広義の京焼風陶器の範疇に含まれるものである。特徴は高台畳付きを除く全体に透明釉が掛けられ、表面に細かい貫入がみられる。やや高めの高台は台形を呈し、高台内も施釉される。京焼風碗は京焼を写したものともいわれる肥前唐津産陶器で、所謂京焼風陶器の代表的なものであり、底部から腰部の破片が出土した。精緻な作りの低い削り出し高台の付く外底部中央に、径14mmの浅い円形の削りによる凹みが見られ、解読不能の刻印がされる。皿では美濃系の灰釉丸皿3点があり、内面に重ね焼痕がみられる。ほかには内面に菊の文様の刻まれた小皿の底部が出土した。瀬戸美濃地方産出の菊皿と考えられる。鉢では白泥象嵌で文様を施した上に透明釉を掛けた三島手の唐津鉢の破片が出土。磁器では波佐見系、肥前系の破片が出土。以上のように在地産のほかに瀬戸・美濃、肥前の2大生産地からの製品の流入が認められた。

W－3はW－5に平行する小規模な溝で、瀬戸・美濃系の蓋、灯明皿、灰釉碗など江戸期の陶器類が出土した。

(3) ま と め

今回の調査により、遺跡内には平安時代と中・近世の遺構群が存在することが判明した。遺跡の最北部の微高地に位置するC区は平安時代の集落域であり早くから生活域として利用されていたといえる。時期は鶴光路板橋Ⅱ遺跡の住居群とほぼ同時期の9世紀末と考えられる。それに対して遺跡中央部のA区は近世の遺構が、さらに南のB区では中世と近世の遺構が確認され、C区より遅れた時期に開発された地域と言える。B区のW－1・2は市域においても数少ない中世遺構で貴重な例と言える。A区で検出されたW－5は環濠屋敷の濠である可能性があり、前橋南部地区の特色を示すものと言える。現在はA・B区とも盛土されA区は宅地に、C区は畑になっているがかつては低湿地であったと考えられる。

遺構の種類は全調査区を通して溝跡が最も多く、遺跡地の水溜りの悪さを物語る。現在、遺跡の西側に南流する端気川は、これらの溝とほぼ平行または直行するかたちで走行し、古くから多くの溝を集める主流であった可能性も考えられる。

以上のように当地域の歴史や旧地形などの一端を解明できたのは幸いであった。今回の調査は側道部分と言う限られた範囲であったことや、後世の開発による撹乱、削平が多かったため、端気川と溝群の相関関係や環濠屋敷の解明、W－1溝の性格など不明な点も残った。これらの疑問点の解明は、今後も行われるであろう周辺地域の調査成果に期待したい。

《参考文献》

「前橋市史」第一巻	(1971)	前橋市史編さん委員会
「年 報 18」	(1999)	財群馬県埋蔵文化財調査事業団
「九州陶磁の編年」	(2000)	九州近世陶磁学会
「概説 中世の土器・陶磁器」	(1995)	中世土器研究会
「下滝名塚越遺跡」	(1991)	財群馬県埋蔵文化財調査事業団
「二之宮宮東遺跡」	(1994)	同
「芳賀東部団地遺跡」Ⅲ（縄文・中近世）	(1990)	前橋市教育委員会
「鳥羽遺跡」	(1988・1992)	財群馬県埋蔵文化財調査事業団
「下東西遺跡」	(1987)	同
「上並榎南遺跡」	(1985)	同
「白石第御堂遺跡」	(1991)	同
「多胡蛇黒遺跡」	(1993)	同

Tab. 3　徳丸高堰Ⅲ遺跡土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	胎土	焼成	色調	残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考	Fig.
1	H－1	土師器甕	[12.4]		中粒	良好	灰赤	1／6	口縁部崩れた「コ」の字状で端部は短く外折し、沈線が1条入る。口縁部横撫で、胴部は上位で横方向の箆削り。中位で縦方向の箆削り。胴下半部以下は欠損。		23
2	H－2	須恵高台埦	－		細粒	良好	にぶい橙	底部のみ	高台は断面三角形で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り後撫で調整。		23
3	H－2	台付甕	－	－	中粒	良好	灰赤	脚のみ	脚部上位で外反気味に開き、横撫で。下位は欠損。		23
4	H－4	須恵高台埦	[13.3]	5.7	細粒	強良	灰	1／3	轆轤成形。口縁部は外反し、体部僅かに丸みを持ち開く。高台は端部が丸みを帯びた断面逆台形でやや開く。底部は回転糸切り後撫で調整。		23
5	H－4	須恵坏	[13.3]	－	中粒	良好	にぶい橙	1／6	轆轤成形。口縁部僅かに外反し、体部上位は内湾し開く。		23
6	H－5	土師埦	[11.4]	(3.0)	粗粒	良好	にぶい橙	1／6	口縁端部は直立し、体部に外反し開く。口縁部横撫で、体部外面へら削り、指頭調整。		23
7	H－5	土師坏	11.6	3.6	粗粒	良好	橙	2／5	体部から口縁部にかけ直線的に開き、底部は僅かに丸みを帯びる。口縁部横撫で、体部箆削り、指頭調整。底部は箆削り。内面撫で、指頭調整。		23
8	W－1	軟質瓦器擂鉢	[33.2]	13.8	中粒	良好	灰	1／4	口縁端部はほぼ平坦でやや外反する。体部から口縁部にかけ直線的に開く。内面に3条ないし4条の荒い卸目があり摩耗が激しい。内外面の上位は横撫で、下位は指による圧痕で雑である。還元気味。	在地系 15C～16C	23
9	W－1	土師質皿	7.6	1.9	中粒	良好	橙	3／4	轆轤成形。底部に回転糸切り未調整で板状圧痕あり。口縁の一部が耳状に折れる。内面撫で。口縁内外面に油煙付着。酸化気味。	灯明皿	23
10	W－1	土師質皿	11.0	2.6	細粒	良好	浅黄橙	ほぼ完形	轆轤成形。器高は深めで器肉が厚い。体部はやや外反し開く。内・外面撫で。底部に回転糸切り未調整。		23
11	W－1	土師質皿	11.5	2.2	中粒	良好	橙	5／6	轆轤成形。器高は深めで器肉が厚い。体部から口縁部にかけて外反し開く。内外面に撫で。底部回転糸切り後撫で調整。酸化気味。		23
12	W－1	土師質皿	7.2	2.7	細粒	良好	浅黄橙	5／6	轆轤成形。内面撫で。底部は回転糸切り後撫で調整。		23
13	W－1	土師質皿	12.4	3.1	中粒	良好	にぶい橙	3／4	轆轤成形。器高は深めで器肉は厚い。体部やや外反し、開く。内面撫で、底部は回転糸切り未調整。		23
14	W－1	土師質皿	11.6	2.7	中粒	良好	にぶい橙	完形	轆轤成形。器高は深めで器肉が厚い。体部やや外反し開く。内面撫で。底部は回転糸切り未調整。酸化気味。		24
15	W－1	軟質陶器火鉢			中粒	良好	灰黄褐	口縁部の一部のみ	火鉢の口縁部及び体部上位の破片である。内湾する口縁部上端は平坦で、側面は2条に隆帯に挟まれて雷文帯の施紋あり。体部上位は内湾する。内面撫で。酸化気味。		23
16	W－2	軟質陶器内耳鍋	[28.8]	－	細粒	良好	灰	1／8	轆轤成形。口縁部は内湾気味に開き、端部上端は平坦で、短く外反する。体部は僅かに内湾し、あまり開かない。内耳は断面楕円形で華奢な作りである。体部外面に箆削りで一部指による圧痕と擦痕あり。内面撫で。還元気味。	15C～16C	24
17	W－2	土師質皿	[13.4]	3.5	粗粒	良好	灰白	1／3	轆轤成形。器高は深めで器肉は厚い。体部緩く外反し開く。内面撫で。底部は回転糸切り後撫で調整。		24
18	W－2	土師質皿	8.0	1.8	粗粒	良好	にぶい黄橙	ほぼ完形	轆轤成形。内面撫で。底部は回転糸切り後撫で調整。		24
19	W－3	土師質皿	8.0	2.9	粗粒	良好	明褐灰	完形	轆轤成形。口縁部は外稜状に段が付く。内面撫で。底部は回転糸切り後撫で調整。		24

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	胎土	焼成	色調	残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考	Fig.
20	W－2	磁器染付皿	[11.0]	2.3	細粒	良好	灰白	底部のみ 2／3	欠部から口縁部にかけ内湾し開く。底部は碁笥底で砂が付着。底部内面及び体部外面から口縁部外面に呉須による施紋有り。	景徳鎮窯系「青花皿」民窯 15C	24
21	W－3	陶器蓋	(6.4)	1.4	細粒	良好	灰白	2／3	轆轤成形。下底面箆削り、上面に鉄釉を施し耳状の摘みが付く。裏面は無釉。	瀬戸・美濃系 18C	24
22	W－3	灰釉碗	[12.3]	－	中粒	良好	オリーブ灰	1／3	轆轤成形。丸い腰部から体部、口縁へと直線的に立ち上がる。器面は凹凸があり内外面とも厚く灰釉が施される。底部は欠損する。	瀬戸・美濃系 18C前	24
23	W－3	油受皿	10.3	2.5	細粒	良好	褐	2／3	轆轤成形。平底の底部と体部下半箆削り。器高よりやや低い油受け皿が付く。内面と外面の一部に鉄錆釉を施す。	瀬戸・美濃系 18C末～19C末	24
24	W－5	陶器碗	[12.0]	7.2	細粒	良好	オリーブ黒	1／4	轆轤成形。腰部に張りがなく体部は緩やかに内湾し、口縁は直立する。高台を除く内外面に鉄釉を施し、口縁部外面に藁灰釉を掛ける。	瀬戸・美濃系「尾呂茶碗」18C	24
25	W－5	陶器碗	[11.8]	7.9	中粒	良好	灰オリーブ	1／3	轆轤成形。腰部に張りがなく体部は緩やかに内湾し、口縁は直立する。高台を除く内外面に鉄釉を施し、口縁部外面に藁灰釉を掛ける。	瀬戸・美濃「尾呂茶碗」18C前	24
26	W－5	陶器碗	[12.0]	8.7	中粒	良好	にぶい黄橙	1／2	轆轤成形。腰部に張りがなく体部は緩やかに内湾し、口縁は直立する。高台を除く内外面に鉄釉を施し、口縁部外面に藁灰釉を掛ける。	瀬戸・美濃系「尾呂茶碗」18C	24
27	W－5	陶器碗	[13.0]	8.9	細粒	極良	浅黄	1／2	轆轤成形。体部に深く小径で高めの高台が付く。淡黄色がかった透明釉が高台内まで施釉され、器面に貫入が入る。	唐津系「呉器手」17C中～後	24
28	W－5	陶器碗	－	－	細粒	良好	灰白	1／2	口縁部と体部の大部分を欠く。丸みを持つ腰部から上に透明釉を施し、きめ細かい貫入が入る。特徴な削りだし高台の付く底部外面中央に浅い円形の削りだしを持つ。刻印有り。	唐津系「京焼風陶器」17C中～	24
29	W－5	陶器碗	[11.8]	7.7	細粒	極良	浅黄	1／2	轆轤成形。体部は深く、小径で高めの高台が付く。淡黄色がかった透明釉が高台内まで施釉され、器面に貫入が入る。	唐津系「呉器手」17C中～後	25
30	W－5	陶器碗	[11.8]	7.8	細粒	極良	浅黄	1／2	轆轤成形。体部は深く、小径で高めの高台が付く、淡黄色がかった透明釉が高台内まで施釉され、器面に貫入が入る。	唐津系「呉器手」17C中～後	25
31	W－5	陶器香炉	[13.8]	(6.1)	中粒	良好	明褐灰	1／4	轆轤成形。腰部外面に張り出しを持ち、体部は僅かに内湾し、肥厚な口縁に至る。内面と外面腰部から上に施釉。焼成不良。	瀬戸・美濃系 18C前	25
32	W－5	灰釉丸皿	[11.2]	3.9	細粒	良好	灰白	1／4	轆轤成形。口縁部を除く外面は箆削り。内面及び高台を除く外面にどぶ付けの灰釉。内面に重ね焼き痕。	美濃系 17C～18C	25
33	W－5	灰釉丸皿	[14.0]	3.2	細粒	良好	灰白	1／3	轆轤成形。口縁部を除く外面は箆削り。内面及び高台を除く外面にどぶ付けの灰釉。内面に重ね焼き痕。	美濃系 17C～18C	25
34	W－5	灰釉丸皿	14.0	3.4	細粒	良好	灰白	2／3	轆轤成形。口縁部を除く外面は箆削り。内面及び高台を除く外面にどぶ付けの灰釉。内面に重ね焼き痕。	美濃系 17C～18C	25
35	W－5	内耳焙烙	[38.0]	5.1	中粒	良好	灰	1／3	轆轤成形。平底で浅い器形。体部回転へら削り、口縁外面横撫でで、指頭痕が残る。口縁端部は外方向へ傾斜、内面撫で、内耳は幅広で下端が底に接する。	在地系 18C中～後	25
36	W－5	内耳焙烙	[38.0]	5.4	中粒	良好	オリーブ黒	1／3	轆轤成形。平底で浅い器形。体部は外傾し、外面に浅い箆削り。口縁部及び内面撫で調整。幅広の内耳の下端は底部に達する。	在地系 18C中～後	25
37	W－5	脊皿	－	－	細粒	良好	浅黄橙	底部・高台の一部	轆轤成形。高台は、やや「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り後、撫で調整。	瀬戸・美濃系 17C	25
38	W－5	陶器鉢	－	－	中粒	良好	灰褐	口縁部片	轆轤成形。内面及び外面の口縁部、体部上半の一部に透明釉がかかる。内面に白泥象嵌技法による花紋と平行線が施される。口縁部の外面に一条の沈線。	唐津系「三島手」17C～18C	25
39	W－6	土師甕	[16.0]		中粒	良好	橙	口縁のみ 1／8	口縁部「く」の字状で、横撫でを施す。口唇部は短く外に開き、端部は丸みを持つ。		25

番号	出土位置	器形	大きさ		胎土	焼成	色調	残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考	Fig.
			口径	器高							
40	W－7	土師坏	12.2	3.8	細粒	極良	橙	3／4	体部緩やかに内湾し口縁部で短く外傾し、底部は僅かに丸みを帯びる。底部及び体部箆削り、口縁部及び内面撫で調整。		25
41	W－7	須恵高台埦	[14.0]	5.1	中粒	良好	灰黄	1／3	轆轤成形。体部緩やかに内湾し、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り未調整。高台欠損。		25
42	W－7	灰釉高台皿	14.8	2.3	細粒	良好	灰白	3／4	轆轤成形。体部僅かに内湾しながら開き、口唇端部短く外反。下端部が面取りされた低い高台が付く。内面刷毛塗り施釉。底部は回転糸切り未調整。	光ケ丘1号窯式 9C後	26
43	W－7	灰釉高台皿	15.2	3.0	中粒	良好	灰白	5／6	轆轤成形。口唇部短く外反し端部で短く丸まる。底部は回転糸切り後、軽い撫で。体部緩やかに内湾し開く。高台は雑で歪な造り。施釉方法は浸し掛け。内面に重ね焼き痕が見られる。	折戸53号窯式 10C後	26
44	W－7	須恵高台埦	14.2	4.9	粗粒	良好	橙	2／3	轆轤成形。体部やや内湾し、口唇端部短く外反。幅広で雑な付高台。底部は回転糸切り未調整。		26
45	W－7	須恵坏	13.2	4.1	中粒	良好	暗灰黄	2／3	轆轤成形。体部緩く内湾、口縁端部は外反する。底部は平底で回転糸切り未調整。内外面とも黒色処理。	黒色土器	26
46	W－7	須恵甕			中粒	良好	灰	1／10	口縁部やや外反し、開く。胴部外面は平行叩き文及び撫で。口縁部内面箆削り、体部内面同心円状あて具痕及び撫で。		26
47	W－8	土師台付甕			中粒	良好	灰褐	脚のみ	台付甕の脚部。裾部に大きく開き、横撫で、指頭調整を施す。		26
48	W－8	須恵高台埦	－	－	細粒	良好	灰	底部のみ	轆轤成形。断面三角形気味の高台が付く。底部は回転糸切り未調整。底部上面に解読不能な刻書あり。	「刻書土器」	26
49	W－8	須恵高台埦	[12.8]	4.7	中粒	良好	灰黄褐	1／3	轆轤成形。体部は下位で僅かに膨らみを持ち、体部上位から口縁部にかけ外傾する。高台は端部が丸みを持ち僅かに開く。底部は回転糸切り後撫で調整。		26
50	W－8	須恵坏	[13.2]	3.9	中粒	良好	赤橙	1／3	轆轤成形。体部は外傾し、口縁部はやや外反する。平底で器肉は薄い。底部は回転糸切り未調整。酸化気味。		26
51	W－12	須恵長頸壺	－	－	細粒	良好	灰白	頸部のみ	長頸壺の頸部片である。轆轤成形。		26
52	W－12	須恵高台埦	－	－	中粒	良好	灰白	1／3	轆轤成形。体部は緩く内湾し、あまり開かない。高台の断面は端部が丸みを持つ長方形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り後撫で調整。		26

注）表の記載は、以下の基準で行った。
① 胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。
② 焼成は、極良、良好、不良の三段階。
③ 色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）に拠った。
④ 大きさの単位はcmであり、現存値を（ ）、復元値を［ ］で示した。

Tab. 4 石製品観察表

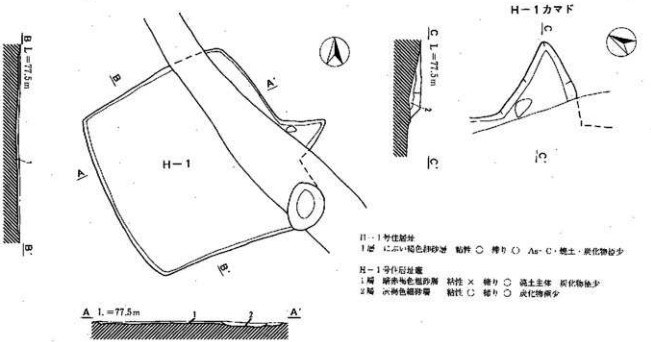
番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	特徴	備考	Fig.
1	W－1	砥石	(9.9)	3	2.7	127g	流紋岩	2面使用		29
2	W－1	砥石	(10.3)	3.4	2.9	166g	流紋岩	3面使用		29
3	W－2	五輪塔	(18.5)	13.6	－	2.1kg	砂岩	空輪部欠損	空風輪	28
4	W－2	五輪塔		28.1	18.4	16.2kg	粗粒安山岩	－	水輪	27
5	W－2	石臼		(13.2)	(8.4)	1.6kg	粗粒安山岩	使い込みよる摩耗が著しく、引き手穴の付け替えの痕跡有り。	上臼	28
6	W－2	五輪塔	(31.2)	17.9	－	7.0kg	粗粒安山岩		空風輪	28
7	W－2	五輪塔	(31.8)	19.6	－	11.5kg	粗粒安山岩	－	空風輪	28
8	W－2	五輪塔	(29.6)	17	－	5.2kg	粗粒安山岩	－	空風輪	28
9	W－2	五輪塔	(33.2)	17.2	－	7.0kg	粗粒安山岩	－	空風輪	28
10	W－2	砥石	(5.1)	3.2	2.7	64g	流紋岩	4面使用		29
11	W－2	砥石	(3.9)	3.4	(1.6)	25g	流紋岩	4面使用		29
12	W－2	砥石	(5.3)	2.7	1.9	46g	流紋岩	4面使用		29
13	W－4	砥石	10.8	2.9	2.3	100g	流紋岩	1面使用		29
14	W－4	砥石	8.8	3	2.9	116g	流紋岩	2面使用		29
15	W－4	砥石	11.1	2.8	2.5	111g	流紋岩	3面使用		29
16	W－5	砥石	11.7	3.2	3.5	160g	流紋岩	2面使用		29

Tab. 5 土製品観察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	特徴	備考	Fig.
1	H－2	土錘	3.9	2.4	－	21g		手捏ね成形、孔径4.5cm、周溝面は平らに荒調整。褐灰色		27
2	W－7	土錘	3.9	2.5		25.6g		手捏ね成形、孔径5.5cm、周溝面は平らに荒調整。黒褐色		27
3	W－7	土錘	4.9	2.3		20.4g		手捏ね成形、孔径4.0cm、両端が細くなり丸みを帯びた形。黒褐色		27
4	W－7	土錘	4.2	2.6		26.8g		手捏ね成形、孔径8.0cm。褐灰色		27
5	W－7	土錘	4.1	2.4		23g		手捏ね成形、孔径5.0cm、径は円柱形を呈し両端面は平らで荒調整。		27
6	W－7	土錘	4.7	2.2		18g		手捏ね成形、孔径7.0cm。浅黄橙		27
7	W－8	土錘	4.1	1.1		4.4g		手捏ね成形、孔径4.0cm、細身。にぶい橙		27

Tab. 6 銅銭観察表

No	出土位置	種別	径(cm)	孔(cm)	厚さ(cm)	重量(cm)	銭貨名	初鋳年代	残存状況	特徴	Fig.
1	W－1	銅銭	2.4	0.6	1.0	3.1	聖宋元宝	1068年	完形		27
2	W－13	銅銭	2.4	0.5	1.0	3.1	不明	不明	完形	篇文が著しく銭名の判読はできない	27
3	W－13	銅銭	2.4	0.7	1.0	1.3	不明	不明	1／4欠	篇文が著しく銭名の判読はできない	27
4	W－13	銅銭	2.4	0.7	1.0	1.8	不明	不明	二分銅	篇文が著しく銭名の判読はできない	27



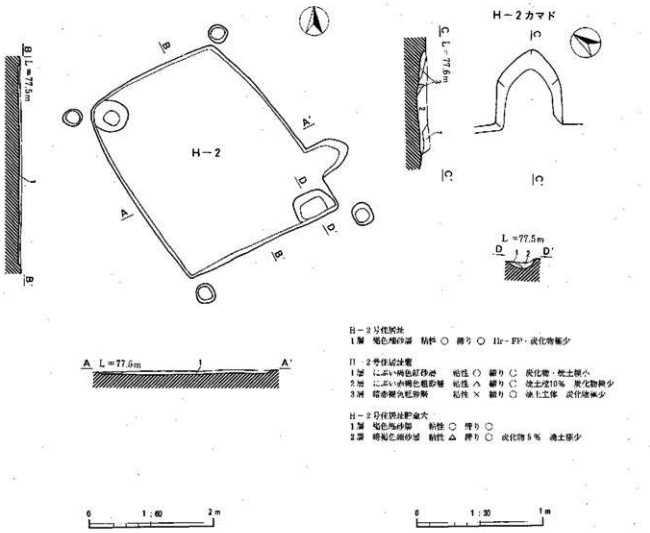
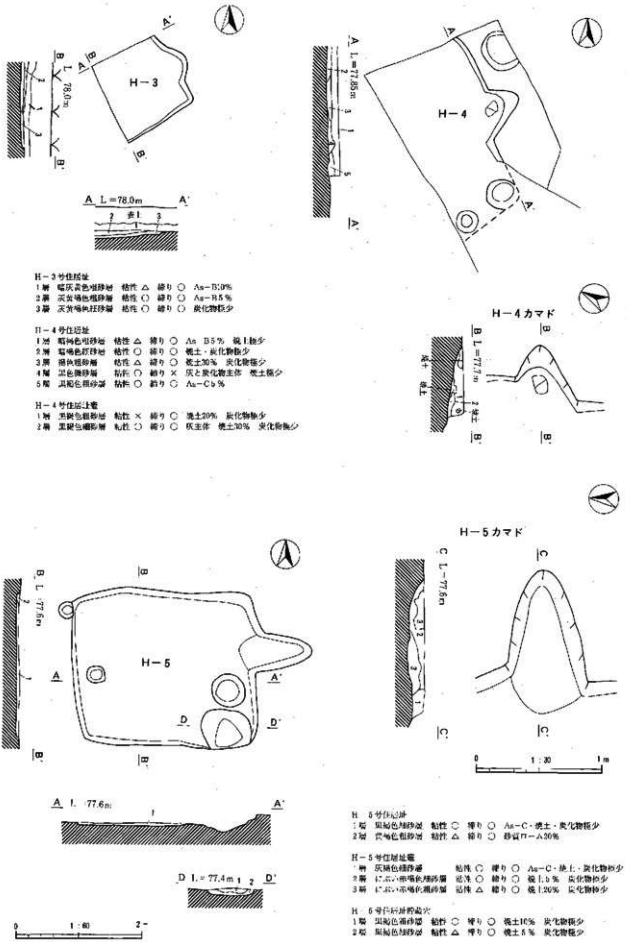


Fig. 16 H－1・2号住居址



H－3号住居址
1層 暗灰黄色粗砂層 粘性 △ 締り ○ As－B10%
2層 灰黄褐色粗砂層 粘性 ○ 締り ○ As－B5%
3層 灰黄褐色粗砂層 粘性 ○ 締り ○ 炭化物極少

H－4号住居址
1層 暗褐色粗砂層 粘性 △ 締り ○ As B5% 硬土極少
2層 暗褐色粗砂層 粘性 ○ 締り ○ 硬土・炭化物極少
3層 褐色粗砂層 粘性 △ 締り ○ 硬土30% 炭化物極少
4層 黒色微砂層 粘性 ○ 締り × 灰と炭化物主体 硬土極少
5層 黒褐色粗砂層 粘性 ○ 締り ○ As－Cb%

H－4号住居址壁
1層 黒褐色粗砂層 粘性 × 締り ○ 硬土20% 炭化物極少
2層 黒褐色細砂層 粘性 ○ 締り ○ 灰主体 硬土30% 炭化物極少

H－5号住居址
1層 黒褐色細砂層 粘性 ○ 締り ○ As－C・硬土・炭化物極少
2層 黒褐色粗砂層 粘性 △ 締り ○ 砂質ローム20%

H－5号住居址壁
1層 灰褐色細砂層 粘性 ○ 締り ○ As－C・硬土・炭化物極少
2層 にぶい赤褐色細砂層 粘性 ○ 締り ○ 硬土5% 炭化物極少
3層 にぶい赤褐色細砂層 粘性 △ 締り ○ 硬土20% 炭化物極少

H－6号住居址粉粒火
1層 黒褐色細砂層 粘性 ○ 締り ○ 硬土10% 炭化物極少
2層 黒褐色細砂層 粘性 △ 締り ○ 硬土5% 炭化物極少

Fig. 17 H 3～5号住居址

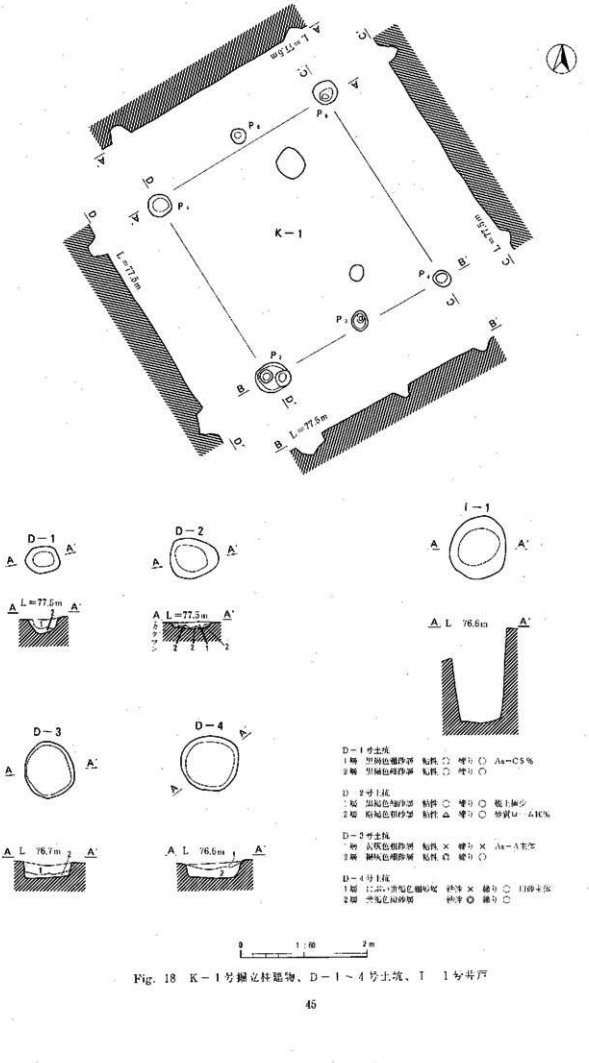


Fig. 18 K－1号掘立柱建物、D－1～4号土坑、I 1号井戸

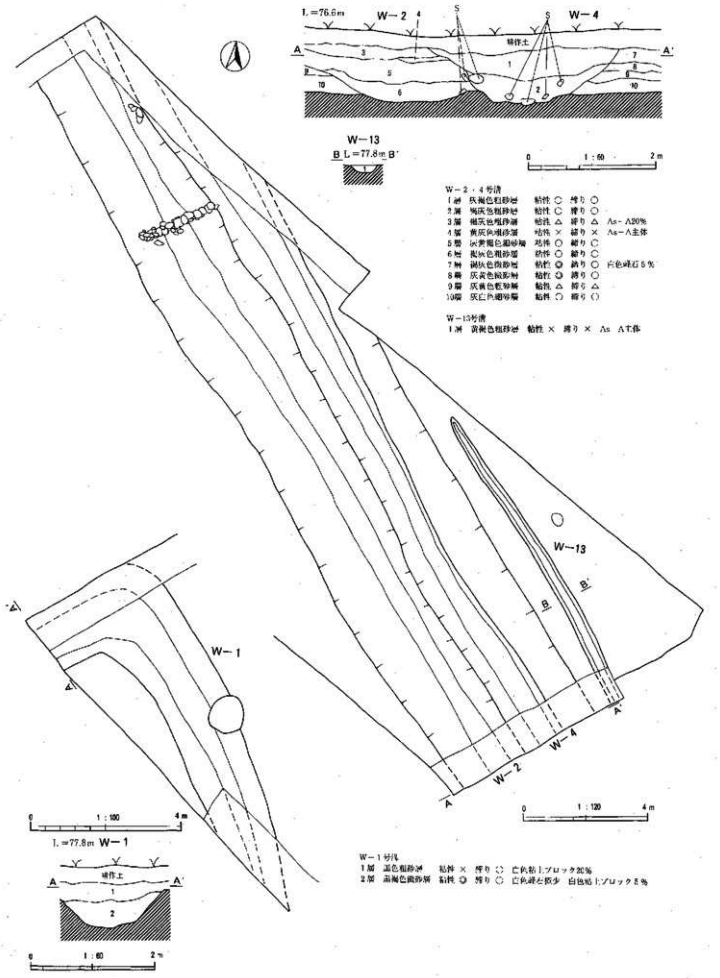


Fig. 19 W－1・2・4・13号溝

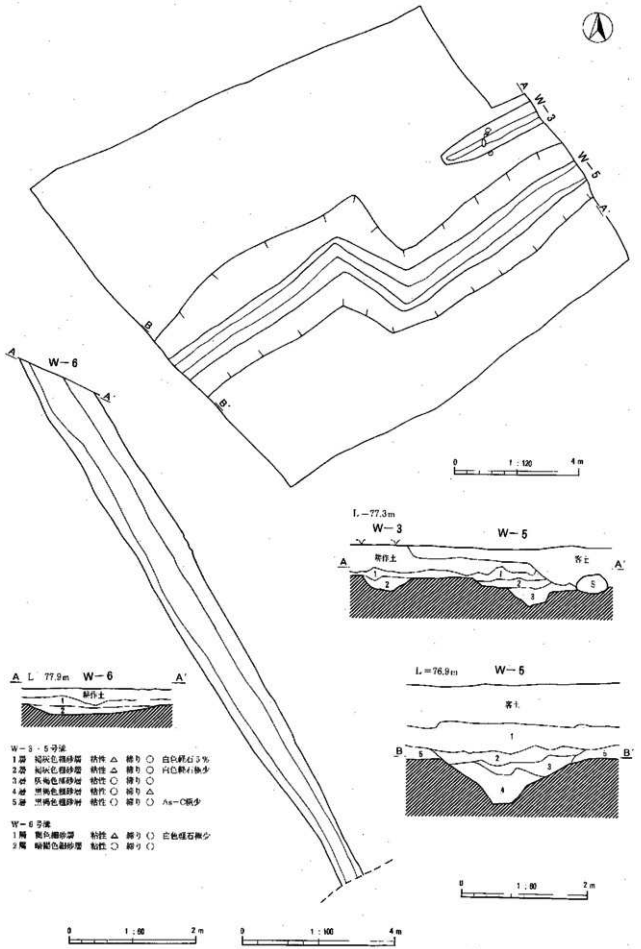


Fig. 20 W 3・5・6号溝

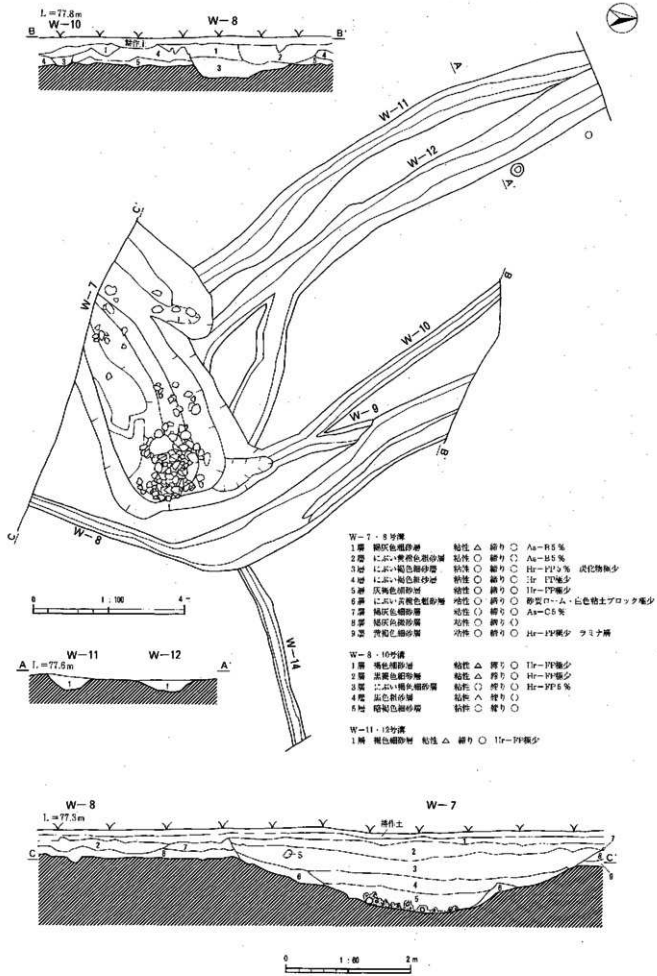


Fig. 21 W－7～12・14号溝

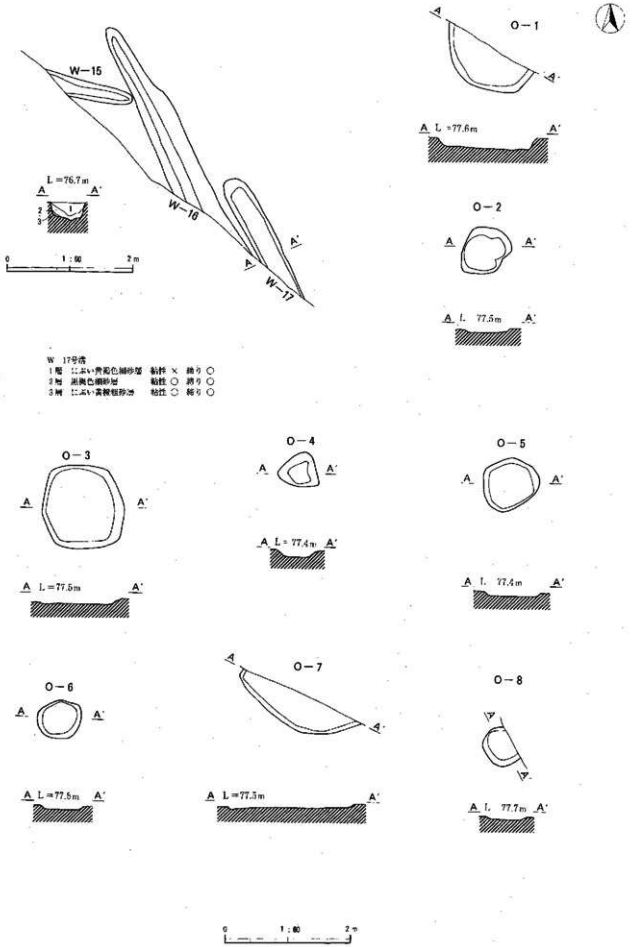


Fig. 22 W−15～17号溝、O−1～8号落ち込み

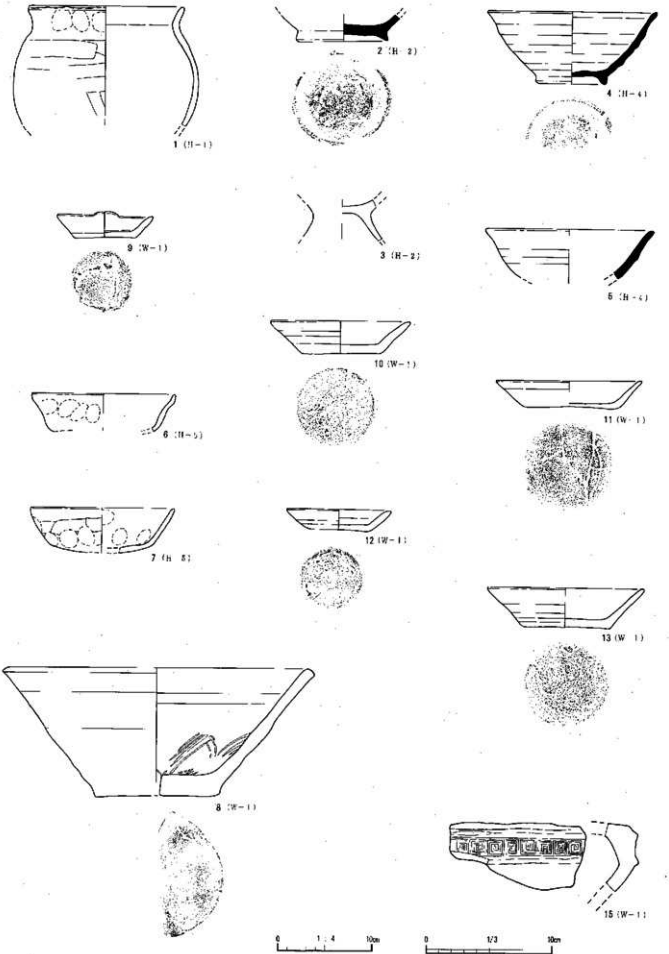


Fig. 23 H 1・2・4・5号住居址、W－1号溝 出土遺物

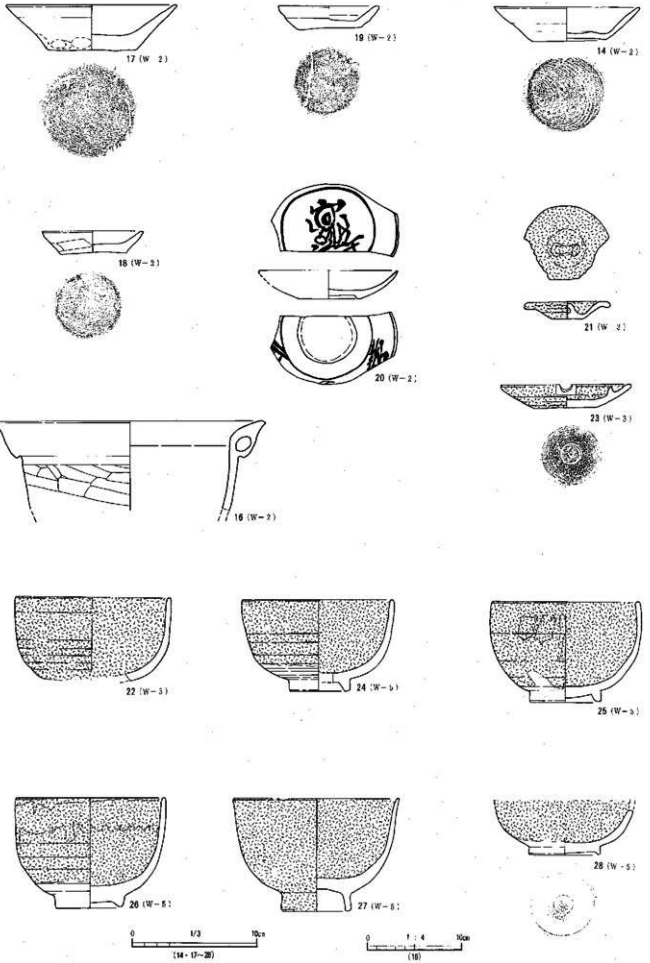


Fig. 24 W－2・3・5号溝 出土遺物

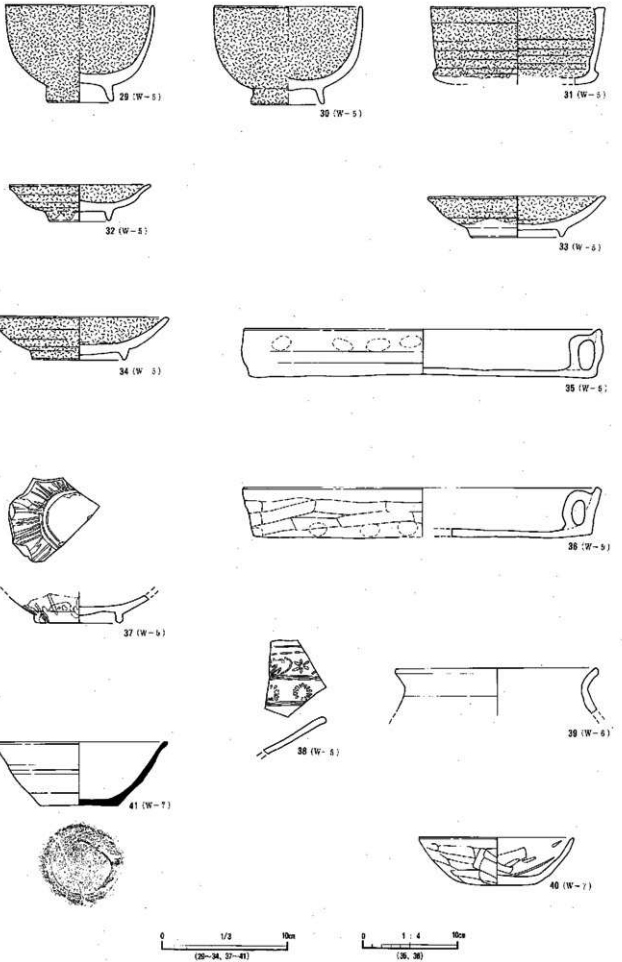


Fig. 25 W－5～7号溝 出土遺物

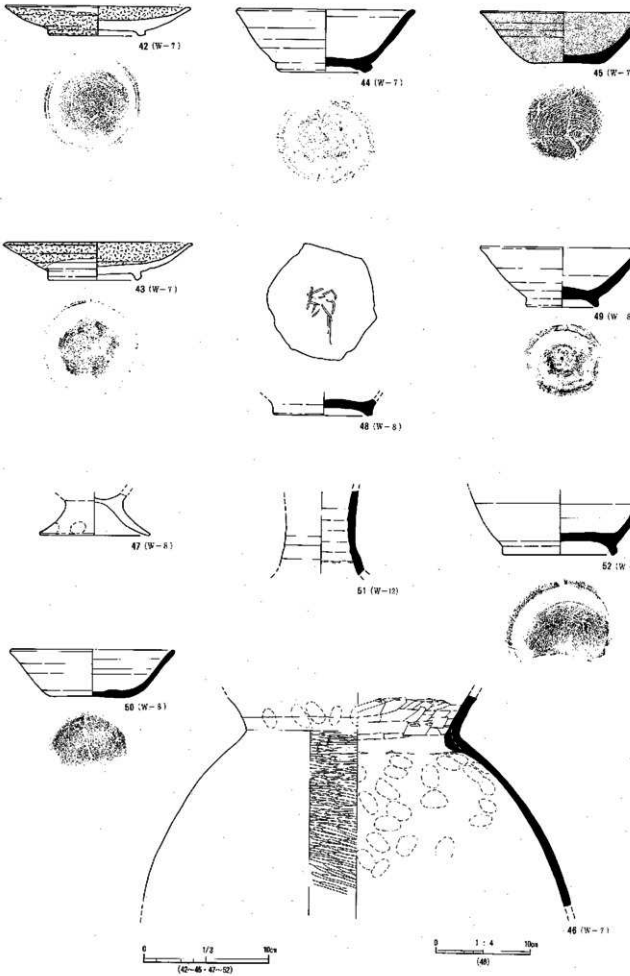


Fig. 26 W－7・8・12号溝 出土遺物

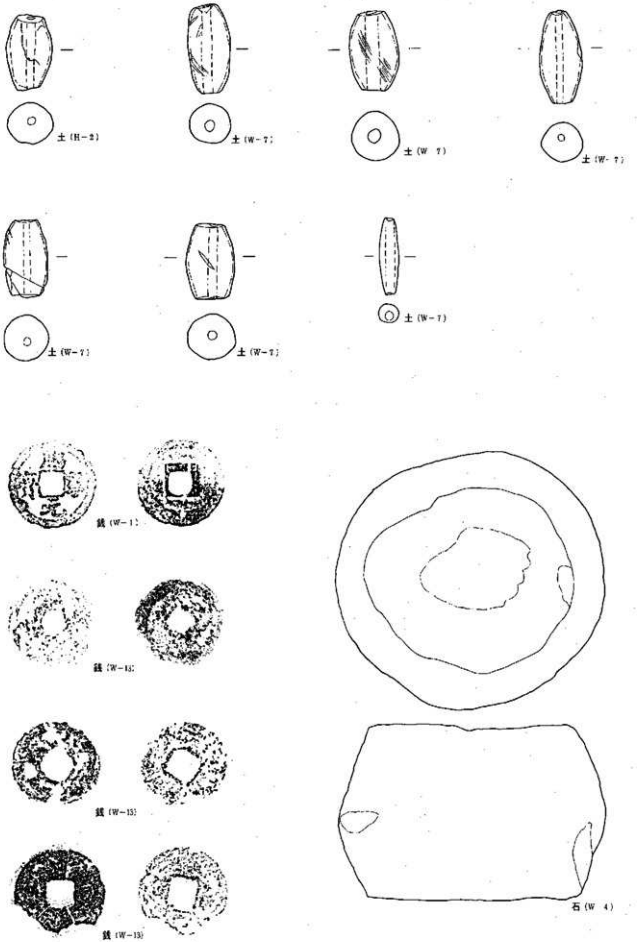
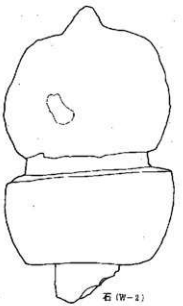
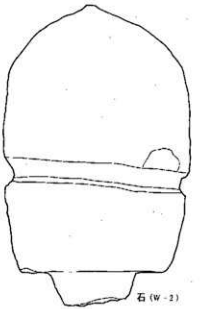
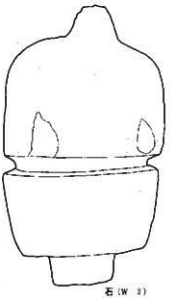
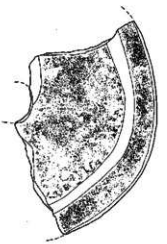


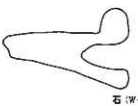
Fig. 27　H－2号住居址、W－1・2・7・13号溝　出土遺物











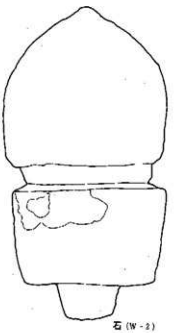


Fig. 28 W－2号溝 出土遺物

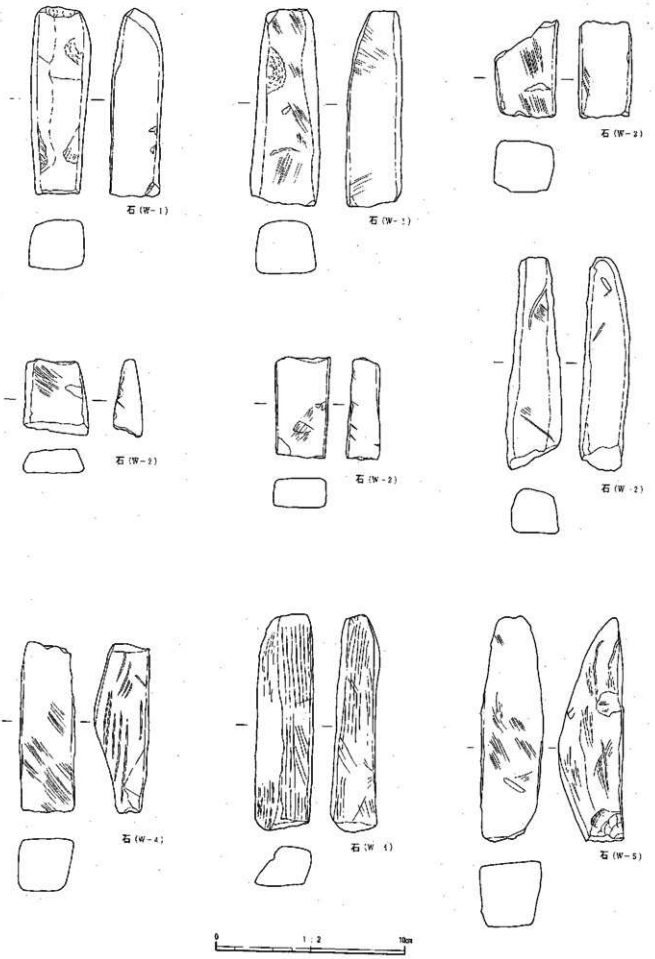
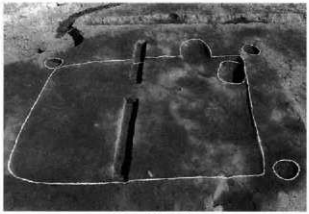


Fig. 29 W－1・2・4・5号溝 出土遺物

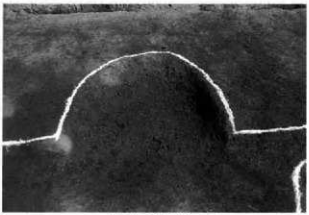
徳丸高張Ⅲ遺跡C区　全景（S）

H－1　全景（W）



H－2　全景（W）

H－1カマド　全景（W）

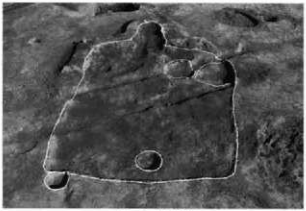


H－2　全景（W）

H－3　全景（SE）

H－4　全景（W）

H－4カマド　全景（W）



H－5　全景（W）

H－5カマド　全景（W）

H－5　遺物出土状態（N）

K－1　全景（S）

I－1　全景（SW）

W－1　全景（NE）

W－1　全景（S）

W－1　地層断面（E）

W－1　銅鏡出土状態（E）

徳丸高塚Ⅲ遺跡B区南側　全景（N）

W－2・4　全景（S）

W－2　遺物出土状態（S）

W－2　遺物出土状態（N）

W－2　五輪塔出土状態（S）

W－2　遺物出土状態（N）

W－3　全景（E）

W－3　遺物出土状態（E）

W－3　遺物出土状態（E）

W－5　全景（E）

W－5　地層断面（E）

W－5　地層断面（W）

W－5　遺物出土状態（NE）

W－5　遺物出土状態（N）

徳丸高塚Ⅲ遺跡C区　全景（W）

W－7　全景（W）

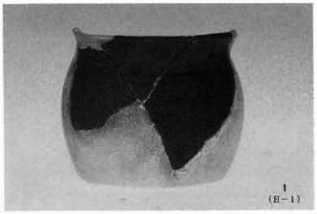
W－7　遺物出土状態（E）

W－8　刻字土器出土状態（NE）

W－7　全景（W）

W－13　全景（S）

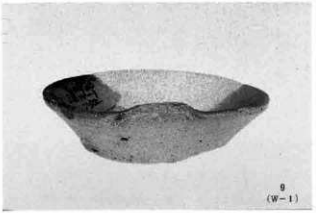
W－15、16、17　全景（N）

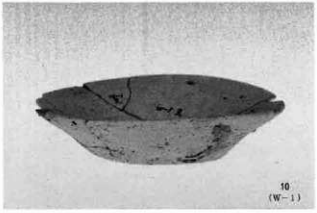

1
(H-1)

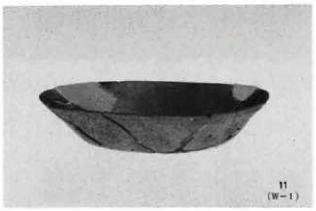
4
(H-1)

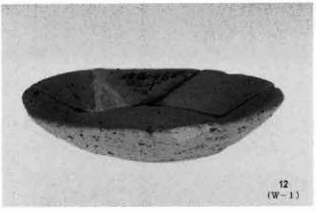
7
(H-1)

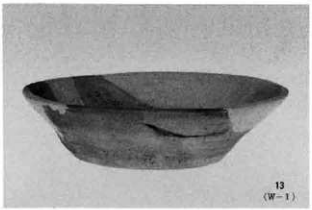
8
(W-1)

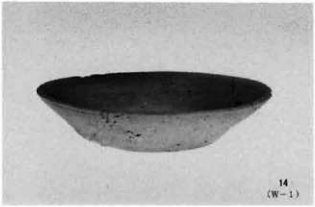

9
(W-1)

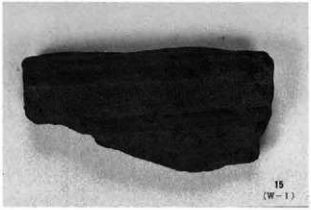

10
(W-1)


11
(W-1)

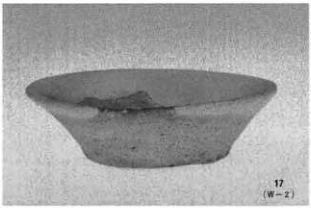

12
(W-1)

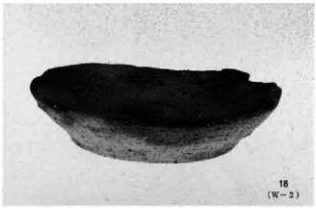

13
(W－1)

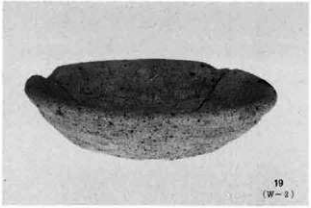

14
(W－1)

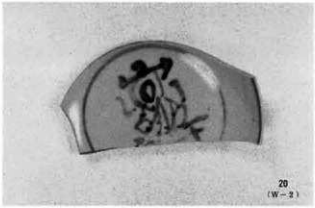

15
(W－1)

16
(W－2)


17
(W－2)


18
(W－2)


19
(W－2)


20
(W－2)

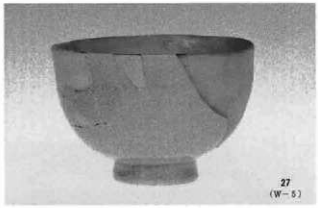
21
(W-3)

22
(W-3)

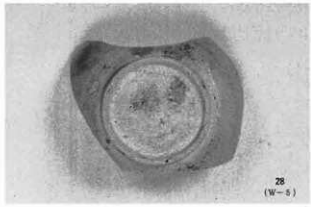
23
(W-3)

25
(W-5)

26
(W-5)



27
(W-5)

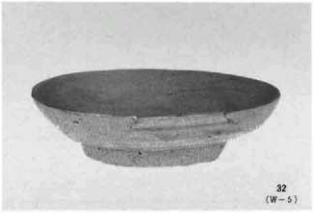


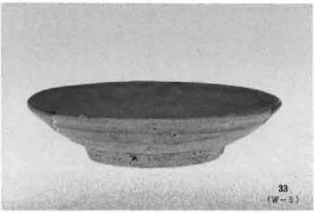
28
(W-5)

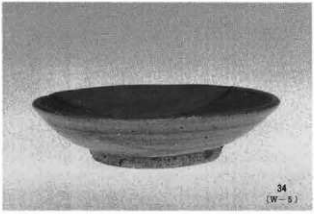
29
(W-5)

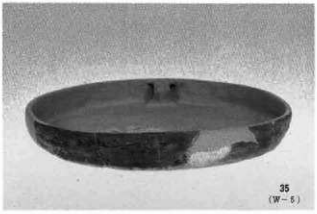
30
(W－5)

31
(W－5)


32
(W－5)

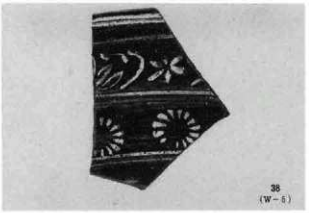

33
(W－5)


34
(W－5)

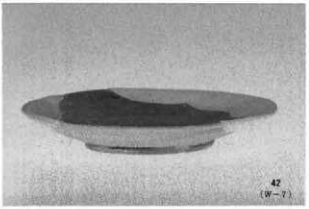

35
(W－5)

36
(W－5)

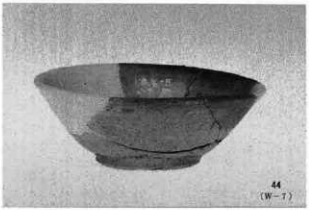
37
(W－5)


38
(W-8)

40
(W-7)

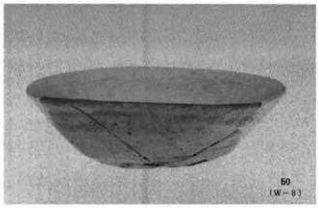

42
(W-7)

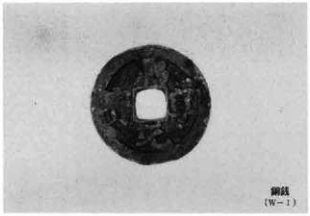
43
(W-7)

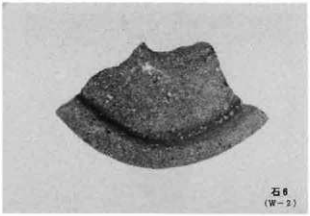

44
(W-7)

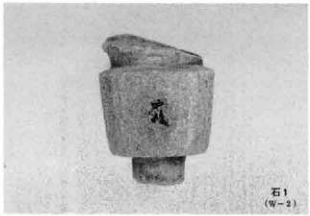
45
(W-7)

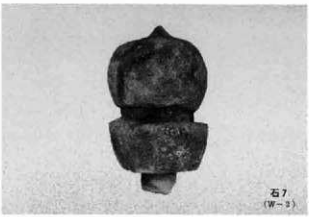
49
(W-8)


50
(W-8)

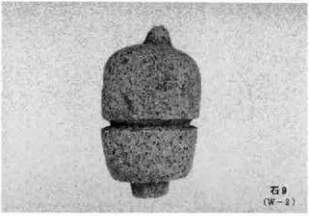

銅銭
(W－1)

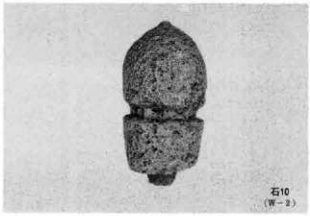

石6
(W－2)

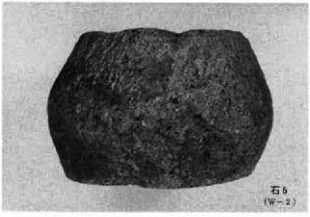

石1
(W－2)

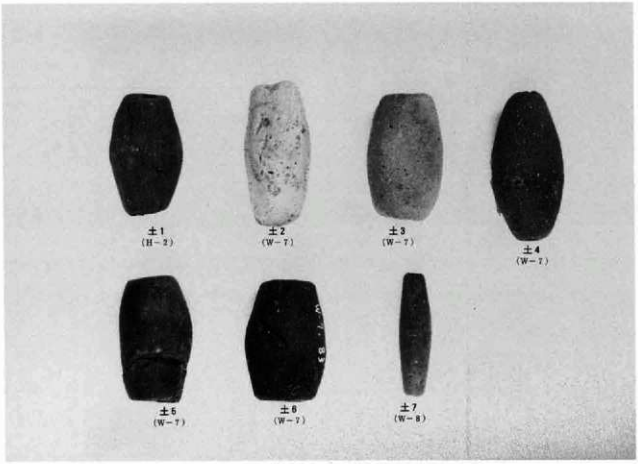

石7
(W－2)

石8
(W－2)

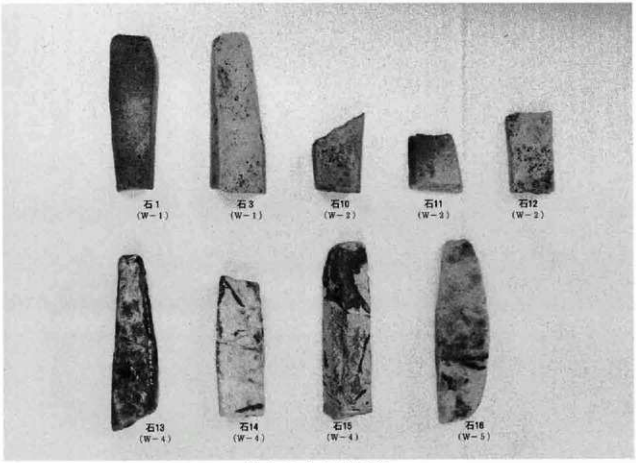

石9
(W－2)


石10
(W－2)


石5
(W－2)



H－2、W－7・8　出土の土器



W－1・2・4・5　出土の礫石

抄　　録

フ リ ガ ナ	ツルコウジエノキバシニイセキ ・ トクマルタカゼキサンイセキ
書　　名	鶴光路榎橋Ⅱ遺跡・徳丸高堰Ⅲ遺跡
副 書 名	北関東自動車道側道　道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	吉田 聖二　小峰 篤
編 集 機 関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664－4
発 行 年 月 日	西暦2000年３月23日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	位 置 北 緯	 東 経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
ツルコウジエノキバシニイセキ 鶴光路榎橋Ⅱ遺跡	マエバシシツルコウジマチ 前橋市鶴光町	10201	11G35	36°19′56″	139°06′17″	19990512 19991108	398㎡	北関東自動車道側道 道路改良事業
トクマルタカセキサンイセキ 徳丸高堰Ⅲ遺跡	マエバシシトクマルマチ 前橋市徳丸町	10201	11G36	36°19′54″	139°06′23″	19990512 19991108	893㎡	北関東自動車道側道 道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
鶴光路榎橋Ⅱ遺跡	集落址 その他	奈良・平安	竪穴住居址10軒 土坑３基、溝４条	須恵器、土師器、 灰釉陶器、石製品
特 記 事 項				
徳丸高堰Ⅲ遺跡	集落址 その他	奈良・平安 中・近世	竪穴住居址５基 掘立柱建物１棟 井戸１基、溝17条	須恵器、土師器、灰釉陶器、 陶磁器、石製品、銅銭
特 記 事 項	景徳鎮窯系の青花皿が出土（W－２号溝）			

鶴光路榎橋Ⅱ遺跡・徳丸高堰Ⅲ遺跡

平成12年３月23日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531
印　刷　株式会社 開文社印刷所

大胡町文化財蔵書印